

紀 要

第 1 号

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

令和8年（2026）

発刊にあたって

福井県教育庁埋蔵文化財調査センターは、昭和56年8月に福井市安波賀町で開設され、県内各地の遺跡の発掘調査や出土品の整理、そしてその成果を活用した普及活動を担ってまいりました。平成9年以降は、駅周辺連続立体交差等事業や近畿自動車道敦賀線建設事業（舞鶴若狭自動車道）などの大規模開発に伴う発掘調査を実施し、その出土遺物の整理・保存のため、花野谷分室、嶺南駐在所、城東分室を順次開設し、当センターの体制を整えてまいりました。令和3年以降は福井市大畑町に本部機能の移転と収蔵施設の集約を進め、現在の体制へと移行しています。

私たちの仕事は、日々誠実に埋蔵文化財の保護に向き合い、その得られた成果を社会へ還元することにあります。そして、調査で出土した遺物等は、地域の歴史を解き明かす貴重な資料であり、その価値を確実に未来へ引き継ぐことこそ当センターの大きな使命であると考えています。そうした責務のもと、これまで蓄積された調査研究の成果を、このたび『紀要』第1号として刊行することとなり、広く共有する場を設けることができましたことを大変喜ばしく思います。

当センター職員が日々の研鑽による調査研究の知見をまとめました論文や研究ノート、資料の紹介を本紀要に掲載することにより、ふるさと福井の歴史文化の解明と埋蔵文化財の保存と活用に少しでも寄与することを願いますとともに、これまで当センターを支えてくださった県民の皆様、関係機関の皆様に心より感謝申し上げます。

令和8年 3月
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所長 中川 佳三

目 次

福井県の墨書土器集成（1）	
川端良招・三原翔吾・菅原瑞穂	1
西山窯跡群出土遺物の再整理	
中川佳三・木村孝一郎	25
林・藤島遺跡（泉田地区）出土 弥生時代鉄製鋸の可能性のある資料について	
林・藤島遺跡出土鉄器検討ワーキンググループ	37

福井県墨書土器集成

—足羽郡・丹生郡編—

<目次>

はじめに	川端良招
第1図 福井県墨書土器出土遺跡〔足羽郡・丹生郡〕	
第1章 福井県墨書土器〔足羽郡・丹生郡〕集成	菅原瑞穂
第1節 集成補遺表	
第1～3表 福井県墨書土器〔足羽郡・丹生郡〕集成補遺表(1)～(3)	
第2節 釈文一覧表	
第4・5表 福井県墨書土器〔足羽郡・丹生郡〕釈文一覧表(1)(2)	
第3節 図版集成	
第2～8図 福井県墨書土器〔足羽郡・丹生郡〕集成(1)～(7)	
第2章 小結	
第1節 足羽郡	川端良招
第2節 丹生郡	三原翔吾
おわりに	
付記	
注	
引用・参照文献	

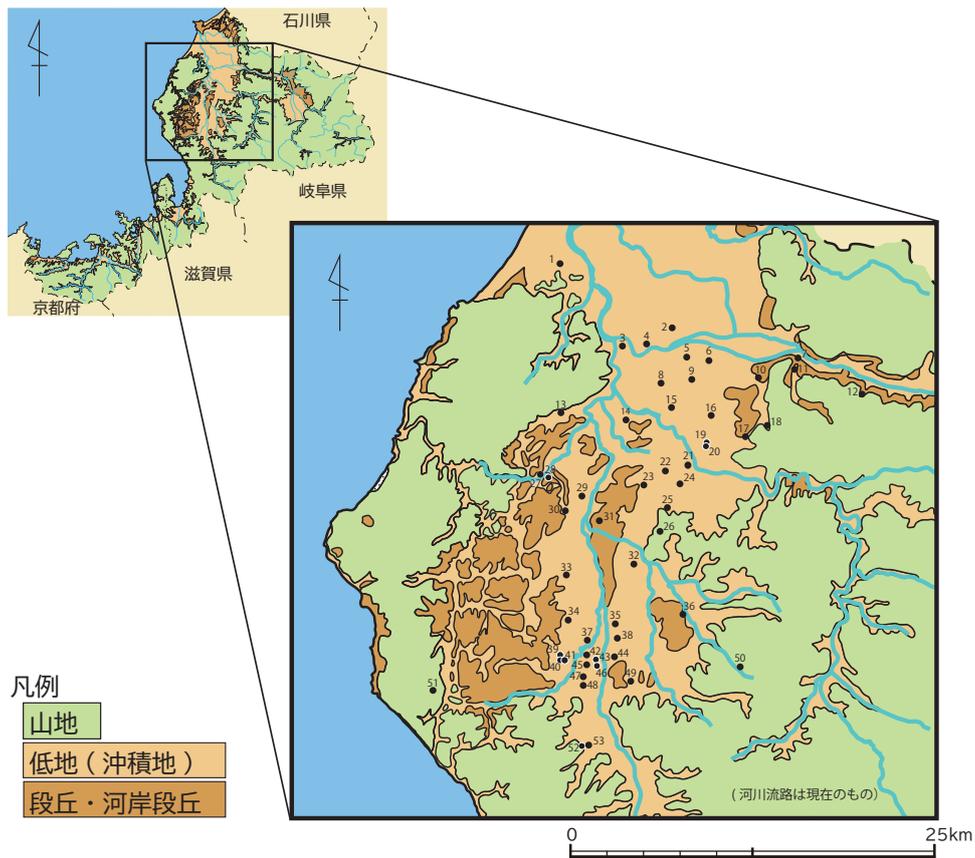
福井県墨書土器集成

—足羽郡・丹生郡編—

川端良招・三原翔吾・菅原瑞穂

はじめに

福井県の墨書土器については、釘谷紀氏による「福井県墨書土器集成」(釘谷 2006)、明治大学古代学研究所による「墨書・刻書土器データベース」(明治大学 2017)があり、福井県内の墨書土器が集成されている。その後、県内における大型公共工事に伴い、新たに多くの墨書土器が確認されたことから、今回、足羽郡・丹生郡(注1)の資料を対象とし、総合的な分析を加えることにより足羽郡・丹生郡の古代社会の様相を提示していきたい(注2)。



第1図 福井県墨書土器出土遺跡(足羽郡・丹生郡)

- 1 波奇三宅田遺跡
- 2 石盛遺跡
- 3 黒丸遺跡
- 4 中角遺跡
- 5 高柳遺跡
- 6 大和田遺跡
- 7 東古市縄手遺跡
- 8 大宮遺跡
- 9 開発遺跡
- 10 吉野崩遺跡
- 11 諏訪間古墳群
- 12 浅見金道口遺跡
- 13 羽坂前田遺跡
- 14 東大寺簡道守荘跡
- 15 福井城跡
- 16 河増遺跡
- 17 大畑遺跡
- 18 上吉野法善田遺跡
- 19 和田神明遺跡
- 20 和田防町遺跡
- 21 小稲津遺跡
- 22 下藤生田遺跡
- 23 今市遺跡
- 24 上藤生田遺跡
- 25 糞塚遺跡
- 26 文殊山城跡
- 27 大森鎌倉遺跡
- 28 明寺山遺跡
- 29 清水山上遺跡・清水山下遺跡
- 30 藍谷在田遺跡
- 31 天神山古墳群
- 32 下河端遺跡
- 33 持明寺遺跡
- 34 安丸官人遺跡
- 35 光源寺遺跡
- 36 国中遺跡
- 37 芝原遺跡
- 38 田島屋敷遺跡
- 39 丹生郷遺跡
- 40 高森遺跡
- 41 上大田遺跡
- 42 平出遺跡
- 43 国府遺跡
- 44 村国遺跡
- 45 深草鹿寺跡
- 46 府中城跡
- 47 高瀬二丁目遺跡
- 48 東千福遺跡
- 49 大屋木/下遺跡
- 50 八石遺跡
- 51 下/宮遺跡
- 52 大塩向山遺跡
- 53 山腰遺跡

第1章 福井県墨書土器〔足羽郡・丹生郡〕集成

第1節 集成補遺表

福井県内においては、明治大学データベース（明治大学2017）による集成以降、北陸新幹線建設や道路改良工事等に伴う発掘調査により一定量の墨書土器が出土している。また、それら遺跡（糞置遺跡、高柳遺跡、波寄三宅田遺跡、大畑遺跡）の報告書が刊行されているため、当該4遺跡から出土した墨書土器を集成した福井県墨書土器〔足羽郡・丹生郡〕集成補遺表を作成した（注3）。各遺跡で新しく確認できた墨書土器を概観すると、糞置遺跡では137点（注4）、高柳遺跡では62点、波寄三宅田遺跡では26点、大畑遺跡では7点の計232点であり、全て須恵器への墨書である。いずれの遺跡も荘園や官営地等との関連が示唆されている。

第1表 福井県墨書土器〔足羽郡・丹生郡〕集成補遺表(1)

No.	遺跡名	所在地	出土遺構	釈文	記銘部位	口径	底径	器高	器種	墨・刻
1	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③	新	底部外面	(12.9)	(7.2)	4.2	杯 A	墨書
2	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	新承	底部外面	13.6	8.7	3.0	杯 A	墨書
3	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ④	井	底部外面	(12.4)	(8.6)	3.1	杯 A	墨書
4	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ①	井	底部外面	(12.8)	(8.2)	2.7	杯 A	墨書
5	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ①④	井	底部外面	12.3	8.6	3.1	杯 A	墨書
6	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ④	井	底部外面	(12.8)	(9.0)	3.1	杯 A	墨書
7	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③	井	底部外面	—	7.0	(2.1)	杯 A	墨書
8	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ④ 1層	井	底部外面	—	—	(0.6)	杯または盤	墨書
9	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ④	井	底部外面	—	—	(1.4)	杯または盤	墨書
10	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1	井	底部外面	(14.0)	(10.0)	2.0	盤 A	墨書
11	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③	家	底部外面	—	—	(0.6)	杯または盤	墨書
12	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	家口〔継力〕	底部外面	16.8	13.4	2.9	盤 A	墨書
13	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SR1	今口	底部外面	—	(6.0)	(2.1)	杯 A	墨書
14	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	奥口〔田力〕	底部外面	—	6.9	(1.3)	杯 B (身)	墨書
15	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	奥六十五	底部外面	13.4	8.6	3.4	杯 A	墨書
16	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② 1層	丸	底部外面	—	(7.4)	(1.3)	杯 A	墨書
17	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ①	酒田	頂部外面	(13.9)	—	(1.9)	杯 B (蓋)	墨書
18	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	佐々尾寺	底部外面	16.2	13.0	2.8	盤 A	墨書
19	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	浄	底部外面	19.5	10.4	7.3	碗 B	墨書
20	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② 1層	田口	底部外面	—	—	(1.3)	杯または盤	墨書
21	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② 1層	田口〔丸カ力カ〕	底部外面	—	(8.0)	(2.0)	杯 A	墨書
22	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ②③ 1層	鯛口〔京カ亨カ〕	底部外面	—	7.6	(3.6)	碗 B	墨書
23	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ②	田丸	底部外面	(15.8)	8.8	5.0	碗 B	墨書
24	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ④	助丸口	底部外面	18.0	15.2	2.5	盤 A	墨書
25	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② 1層	殿	底部外面	—	—	(0.8)	杯または盤	墨書
26	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	西	底部外面	14.5	9.7	5.3	杯 B (身)	墨書
27	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	廿八口	底部外面	12.7	7.2	3.1	杯 A	墨書
28	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② 2層	東家	底部外面	—	6.8	(1.9)	碗 B	墨書
29	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③ 2層	文麻呂 = (墨痕)	頂部外面\内面	14.2	摘径 2.7	3.0	杯 B (蓋)	墨書\墨書
30	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③	文	底部外面	—	8.0	(2.4)	杯 A	墨書
31	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③	文	底部外面	—	9.4	(2.6)	杯 A	墨書
32	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ④ 1層	本口	底部外面	(12.8)	(7.2)	3.0	杯 A	墨書
33	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	南	底部外面	13.8	9.7	2.9	杯 A	墨書
34	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ① 2層	南	底部外面	(11.9)	(8.0)	3.1	杯 A	墨書
35	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③ 2層	南口〔家力〕	底部外面	—	(9.0)	(1.3)	杯 A	墨書
36	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	南口〔丸力〕	底部外面	—	(7.0)	(1.9)	杯 A	墨書
37	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SR1	南口〔丸力〕	底部外面	(13.0)	8.3	3.4	杯 A	墨書
38	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SR1	南口〔丸力〕	底部外面	(13.5)	(8.7)	3.1	杯 A	墨書
39	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ④	南口〔丸力〕	底部外面	14.9	11.7	1.9	盤 A	墨書
40	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	南丸	底部外面	—	(2.5)	(6.0)	杯 A	墨書
41	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	南丸	底部外面	15.2	11.7	1.8	盤 A	墨書
42	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SR1	南丸	底部外面	(16.4)	(13.7)	2.7	杯 A	墨書
43	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SR1	南丸	底部外面	13.3	7.2	3.4	杯 A	墨書
44	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ②③ 1~3層	宮口	底部外面	13.9	8.2	2.0	盤 A	墨書
45	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③ 1層	宮口〔女力〕	底部外面	—	(7.0)	(3.4)	碗 B	墨書
46	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② 1層	吉麻 = (記号)	底部外面\底部内面	—	—	(2.0)	杯または盤	墨書\ヘラ記号
47	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	南丸	底部外面	(14.0)	(8.1)	3.4	杯 A	墨書

第2表 福井県墨書土器〔足羽郡・丹生郡〕集成補遺表(2)

49	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	□田	底部外面	(15.8)	(11.8)	2.5	盤 A	墨書
50	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② 1層	□丸	底部外面	—	—	(0.7)	杯または盤	墨書
51	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	□(記号カ)	底部外面	(15.5)	(13.2)	2.8	盤 A	墨書
52	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ④ 2層	□(記号カ)	底部外面	—	—	(1.4)	杯または盤	墨書
53	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ① ④	□(記号カ)	底部外面	(15.8)	(14.0)	2.2	盤 A	墨書
54	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	□(呂カ)	底部外面	(16.1)	(13.0)	2.3	盤 A	墨書
55	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	□\=(墨痕)	底部外面\底部内面	-	(10.0)	(1.3)	杯 B (身)	墨書\墨書
56	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 1層	□〔十カ〕	底部外面	—	(8.0)	(3.3)	椀 B	墨書
57	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③ 3層	□〔三カ〕	底部外面	—	8.8	(2.0)	杯 B (身)	墨書
58	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ④ 1層	□〔家カ〕	底部外面	—	(9.4)	(2.4)	杯または盤	墨書
59	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ②	□〔家カ〕□	底部外面	(12.8)	(8.8)	4.6	杯 B (身)	墨書
60	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ④ 1層	□〔井カ〕	底部外面	—	(9.2)	(2.4)	杯 A	墨書
61	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③ 2層	□〔井カ〕	底部外面	—	—	(0.6)	杯または盤	墨書
62	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② 1層	□〔員カ〕	底部外面	(15.8)	(10.0)	2.2	盤 A	墨書
63	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② 1層	□〔トカ〕\=(墨痕)	底部外面\内面	(13.5)	(8.6)	3.0	杯 A	墨書\墨書
64	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ① 1層	□〔王カ生カ〕	底部外面	—	—	(1.6)	杯 A	墨書
65	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③ 2層	□〔尾カ〕□	底部外面	—	—	(0.6)	杯または盤	墨書
66	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	□〔数カ〕	底部外面	(17.8)	(13.6)	5.5	盤 B	墨書
67	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② 1層	□〔丸カ〕	底部外面	(13.8)	(9.0)	2.0	杯 A	墨書
68	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ①	□〔丸カ〕□□	底部外面	(12.4)	(7.7)	4.3	杯 B (身)	墨書
69	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	□〔北カ〕□	底部外面	13.4	8.2	3.1	杯 A	墨書
70	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1	□〔十カ〕	底部外面	—	(10.0)	(2.1)	杯 B (身)	墨書
71	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SR2	□〔淨カ〕	底部外面	12.5	8.1	2.9	杯 A	墨書
72	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③ 1層	□〔勝カ〕\=(墨痕)	底部外面\内面	(12.0)	(8.0)	3.0	杯 A	墨書\墨書
73	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SX1	□〔助カ〕	底部外面	(17.8)	(15.2)	2.6	盤 B	墨書
74	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③	□〔鯛カ〕	底部外面	—	(10.0)	(1.2)	杯 A	墨書
75	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③	□〔田カ〕	底部外面	14.0	9.8	2.2	杯 A	墨書
76	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② 1層	□〔田カ〕	底部外面	—	—	(1.3)	杯または盤	墨書
77	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② 1層	□〔田カ〕□〔丸カ久カ〕	底部外面	—	—	(0.9)	杯または盤	墨書
78	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ④	□〔手カ〕	底部外面	16.0	13.8	2.3	盤 A	墨書
79	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	□〔貫カ貴カ〕	底部外面	12.5	9.2	3.8	杯 B (身)	墨書
80	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ④	□〔廣カ〕	底部外面	(12.2)	(8.2)	4.1	杯 B (身)	墨書
81	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ④ 1層	□〔福カ〕	底部外面	—	(8.0)	(1.5)	杯 A	墨書
82	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③ 1・2層	□〔前カ〕屋	底部外面	(14.8)	(8.9)	3.5	杯 A	墨書
83	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	□〔呂カ〕□	底部外面	16.3	13.7	2.5	盤 A	墨書
84	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③ 1層	□□〔尾南カ〕	底部外面	—	—	(0.9)	杯または盤	墨書
85	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ②	□□〔太カ〕	□縁部外面	—	(6.8)	(5.1)	椀 B	墨書
86	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	□□□〔万呂カ〕	底部外面	(15.4)	(14.2)	2.8	盤 A	墨書
87	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	□	底部外面	(15.8)	(9.9)	5.3	杯 B (身)	墨書
88	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	□	底部外面	(16.0)	(11.5)	5.4	杯 B (身)	墨書
89	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	□	底部外面	(11.2)	(6.4)	4.2	杯 B (身)	墨書
90	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	□	底部外面	(12.8)	(7.0)	2.9	杯 A	墨書
91	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1 下層	□	底部外面	15.3	13.3	2.8	盤 A	墨書
92	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	□	底部外面	(15.9)	(12.0)	2.0	盤 A	墨書
93	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ②	□	頂部内面	15.9	—	2.1	杯 B (蓋)	墨書
94	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② 2層	□	底部外面	(14.8)	(10.0)	5.4	杯 B (身)	墨書
95	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ①	□	底部外面	11.0	6.4	3.9	杯 B (身)	墨書
96	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ①~④ 1層	□	底部外面	—	11.3	(4.4)	杯 B (身)	墨書
97	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③	□	底部外面	12.2	9.7	3.5	杯 A	墨書
98	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ②	□	底部外面	12.0	7.8	2.8	杯 A	墨書
99	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② 1層	□	底部外面	—	—	(1.2)	杯または盤	墨書
100	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ④	□	底部外面	—	(10.0)	(3.3)	杯 A	墨書
101	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③ 1層	□	底部外面	—	—	(0.9)	杯または盤	墨書
102	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② 1層	□	底部外面	—	—	(1.1)	杯または盤	墨書
103	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③ 2層	□	底部外面	—	—	(0.7)	杯または盤	墨書
104	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ① 1層	□	底部外面	—	—	(1.4)	杯または盤	墨書
105	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ②	□	底部外面	—	—	—	杯または盤	墨書
106	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ②	□	底部外面	—	—	(6.9)	杯または盤	墨書
107	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③ 2層	□	底部外面	—	(10.0)	(0.9)	杯または盤	墨書
108	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ②	□	底部外面	—	(9.4)	(2.4)	杯 A	墨書
109	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③ 1層	□	底部外面	—	—	(0.6)	杯または盤	墨書
110	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ④	□	底部外面	18.5	16.0	2.0	盤 A	墨書
111	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② ④ 1・2層	□	底部外面	(16.8)	8.4	5.5	椀 B	墨書
112	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② ③ 1層	□	底部外面	14.8	7.9	5.5	椀 B	墨書
113	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	□□	底部外面	(13.0)	(8.4)	3.2	杯 A	墨書
114	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	□□	底部外面\底部内面	-	(8.0)	(1.4)	杯 A または盤 A	墨書\墨書
115	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SR1	□□	底部外面	(15.0)	(8.9)	3.4	杯 A	墨書
116	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③ 1・2層	□□	底部外面	(13.6)	摘径 2.9	2.8	杯 B (蓋)	墨書
117	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② 1層	□□	頂部外面	(17.8)	—	(1.9)	杯 B (蓋)	墨書

第3表 福井県墨書土器〔足羽郡・丹生郡〕集成補遺表(3)

118	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ②	□□	底部外面	(13.9)	(7.6)	2.5	杯 A	墨書
119	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② 1層	□□	底部外面	—	—	(1.0)	杯または盤	墨書
120	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ② 1層	□□	底部外面	(15.8)	(11.4)	2.3	盤 A	墨書
121	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1	□□	底部外面	(16.9)	(9.9)	5.7	椀 B	墨書
122	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	□□□	底部外面	(11.8)	(8.2)	4.8	杯 B (身)	墨書
123	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ④ 2層	□□□	底部外面	—	—	(0.6)	杯または盤	墨書
124	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	[]	底部	(16.0)	(12.6)	2.9	杯 A	墨書
125	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ②	= (一部に墨付着)	内面	(12.2)	摘径	2.6	杯 B (蓋)	墨書
126	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	= (墨付着)	底部内面	(16.0)	(12.0)	2.3	盤 A	墨書
127	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	= (墨痕)	内面	11.8	摘径	2.1	杯 B (蓋)	墨書
128	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1 下層	= (墨痕)	底部外面	11.8	7.8	3.9	杯 B (身)	墨書
129	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	= (墨痕)	底部外面	13.3	9.2	4.5	杯 B (身)	墨書
130	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	= (墨痕)	底部	(13.8)	(7.4)	3.5	杯 A	墨書
131	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	= (墨痕)	底部	—	(18.0)	(2.8)	盤 B	墨書
132	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	= (墨痕)	内面	—	6.4	(2.0)	瓶	墨書
133	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ②③ 1・2層	= (墨痕)	内面	13.0	摘径	3.0	杯 B (蓋)	墨書
134	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 1層	= (墨痕)	内面	—	8.7	(4.3)	椀 B	墨書
135	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅲ区 SD1	= (墨痕力)	内面	12.6	8.7	3.2	杯 A	墨書
136	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ④	= (墨痕力)	底部	(21.0)	15.2	(3.5)	盤 B	墨書
137	糞置遺跡	福井市二上町	Ⅳ区 SR1 ③ 3層	= (墨痕力)	内面	(25.0)	—	(9.9)	甕	墨書
138	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	吉	底部外面	16.3			皿	墨書
139	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SD60	吉	底部外面	16.4			皿	墨書
140	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SD60	吉	底部外面	(16.0)			皿	墨書
141	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SD60	吉	底部外面	12.8			無台杯	墨書
142	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SD60	吉	底部外面	底(9.2)			高台坏	墨書
143	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SD60・61	吉	底部外面	底 8.4			無台杯	墨書
144	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	綾生	底部外面	(16.3)			皿	墨書
145	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SD60	綾生	内面	13.6			蓋	墨書
146	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SD60	綾生	底部外面	12.6			無台杯	墨書
147	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SD60	□〔綾力〕生	底部外面	(12.1)			無台杯	墨書
148	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	本	底部外面	13.9			無台坏	墨書
149	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	本	底部外面	13.4			無台坏	墨書
150	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	本	底部外面	(15.9)			碗	墨書
151	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	黒	底部外面	13.0			無台坏	墨書
152	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SD59	黒	側面	—			無台杯	墨書
153	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	十	底部外面	(15.8)			皿	墨書
154	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SD61 北	十	底部外面	(16.6)			皿	墨書
155	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	中家	底部外面	12.8			無台坏	墨書
156	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	中家	底部外面	13.0			無台坏	墨書
157	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SD60	二	底部内面	13.4			無台杯	墨書
158	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	永?	底部外面	8.6			無台坏	墨書
159	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	大伴	底部外面	(6.6)			高台坏	墨書
160	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	大万呂	底部外面	12.5			無台坏	墨書
161	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SD60	薬口	側面	(12.4)			無台杯	墨書
162	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	倉女	底部外面	13.2			無台坏	墨書
163	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	加津	底部外面	16.8			皿	墨書
164	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SD60・61	佐市力佐印力	底部外面	12.8			無台杯	墨書
165	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SD60	十\十	底部内面\底部外面	13.7			無台杯	墨書
166	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	田	底部外面	17.0			碗	墨書
167	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	中家?	底部外面				皿	墨書
168	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	半	底部外面	(12.4)			無台坏	墨書
169	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SD60・61	日上	側面	12.2			無台杯	墨書
170	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SD60・61	吉力	底部外面	14.1			無台杯	墨書
171	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SD61	楽女	底部外面	15.0			高台坏	墨書
172	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SD61	□津力	底部外面	(14.6)			無台杯	墨書
173	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	□長?	底部外面				不明	墨書
174	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	□家?	底部外面	底(7.4)			無台坏?	墨書
175	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	□	底部外面	(14.9)			皿	墨書
176	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	□	底部外面	—			不明	墨書
177	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	□	底部外面	(15.0)			皿	墨書
178	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	□	底部外面	—			不明	墨書
179	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	□	底部外面	底(8.4)			無台坏	墨書
180	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	□	底部外面	底(7.0)			無台坏?	墨書
181	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	□	底部外面	底(7.6)			皿	墨書
182	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	□	底部外面	底(7.7)			無台坏	墨書
183	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	□	底部外面	底(7.8)			皿	墨書
184	高柳遺跡	福井市高柳 2 丁目	SR02	□	底部外面	底(7.9)			無台坏	墨書

第4表 福井県墨書土器〔足羽郡・丹生郡〕集成補遺表(4)

185	高柳遺跡	福井市高柳2丁目	SR02	□	底部外面	13.0			無台杯	墨書
186	高柳遺跡	福井市高柳2丁目	SD61	□	底部内面	底 (10.2)			無台杯	墨書
187	高柳遺跡	福井市高柳2丁目	SD60	□	側面	(13.0)			無台杯	墨書
188	高柳遺跡	福井市高柳2丁目	SD60	□	底部外面	(12.5)			無台杯	墨書
189	高柳遺跡	福井市高柳2丁目	SD60	□	底部外面	-			不明	墨書
190	高柳遺跡	福井市高柳2丁目	SD59・60	□	側面力	(15.3)			皿	墨書
191	高柳遺跡	福井市高柳2丁目	SD59	□	底部外面	(7.0)			無台杯	墨書
192	高柳遺跡	福井市高柳2丁目	SD61	= (墨痕)	底部外面	(12.9)			高台杯	墨書
193	高柳遺跡	福井市高柳2丁目	SD61	= (墨痕)	底部外面	(15.3)			高台杯	墨書
194	高柳遺跡	福井市高柳2丁目	SR02	= (墨痕)	底部外面	12.0			高台杯	墨書
195	高柳遺跡	福井市高柳2丁目	SR02	= (墨痕)	底部外面	-	12.9	7.0	瓶類	墨書
196	高柳遺跡	福井市高柳2丁目	SD60・61	= (墨痕) \ = (墨痕)	内面\外面	14.1			皿	墨書
197	高柳遺跡	福井市高柳2丁目	SD60	= (墨痕) \ = (墨痕)	内面\外面	底 9.5			碗	墨書
198	高柳遺跡	福井市高柳2丁目	SD60	= (墨痕) \ 田	内面\底部外面	(14.9)			碗	墨書
199	高柳遺跡	福井市高柳2丁目	SR02	[]	底部外面	底 (12.0)			無台杯?	墨書
200	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	5区 P27 SD1	徳	内面縁側	16.6			高台杯蓋	墨書
201	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	5区表土	徳	底部外面中央	-			無台杯	墨書
202	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	8区 E4 I層 8区 F5・6 I層	男□力界□力	底部外面中央	14.0			無台杯	墨書
203	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	5区 P27 SD1	三田	底部外面中央	15.2			皿	墨書
204	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	8区 F8 II層	五月女\五百足	底部外面中央\底部内面中央	14.8			皿	墨書
205	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	6区 N21 P6	田次丁人	底部外面中央	-			高台杯	墨書
206	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	8区 F5 I層 8区 G6 I層	角□力	口縁部外面	-			無台杯	墨書
207	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	7区 T42 SE3	五月女	底部外面中央	-			皿	墨書
208	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	5区 Q30 SE3	木万力	底部外面中央	16.0			皿	墨書
209	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	7区 S35 SD15 I層	寺力 / □ [× 力寸力]	底部内面中央 / 底部外面中央	16.2			皿	墨書
210	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	5区 Q30 SE3	寺	底部外面中央寄り	16.4			皿	墨書
211	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	5区 Q31 SB1 柱穴 P2	志豆□力	底部外面中央	15.4			皿	墨書
212	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	5区 P27 SD1	中山力中小力	底部外面中央	15.6			皿	墨書
213	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	5区 Q28 SB6 柱穴 2	空	底部外面中央寄り	11.8			無台杯	墨書
214	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	3区 J14 SE5	稲	底部外面縁辺	-			無台杯	墨書
215	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	5区 P27 SB2 柱穴 2(SK3)	三月	底部外面	-			無台杯力	墨書
216	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	7区 S36 SD15 I層	下家	底部外面中央寄り	-			無台杯	墨書
217	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	7区 S36 SD15 I層	幸力	底部外面中央	-			無台杯力	墨書
218	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	7区 T35 SD15 I層	罡本	底部外面中央	12.6			無台杯	墨書
219	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	7区 S36 SD15 I層	五月力	底部外面中央	12.2			無台杯	墨書
220	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	7区 S35 SD15 I層	吉万	底部外面中央	13.0			無台杯	墨書
221	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	5区 P27 SD1	本力木□力	底部外面中央	12.0			無台杯	墨書
222	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	5区 P27 SD1	大一	底部外面中央	13.0			無台杯	墨書
223	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	5区 R32 SB1 柱穴 5 (P14)	大	底部外面縁辺	-			無台杯	墨書
224	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	5区 P27 SD1	空力	底部外面中央	-			無台杯	墨書
225	波寄三宅田遺跡	福井県福井市波寄町	5区 P27 SD1	□□□ [鬼□力]	底部外面中央	-			高台杯	墨書
226	大畑遺跡	福井市大畑町	表土	家?	底部外面	-			不明	墨書
227	大畑遺跡	福井市大畑町	E5 包含層	真?	底部外面	-			不明	墨書
228	大畑遺跡	福井市大畑町	F5 河道 1	□\氣	底部内面\底部外面	-			皿	墨書
229	大畑遺跡	福井市大畑町	I3 包含層	□	底部外面	-			皿	墨書
230	大畑遺跡	福井市大畑町	H1 包含層	□	底部外面	-			不明	墨書
231	大畑遺跡	福井市大畑町	G8 河道 1	= (墨痕)	内面	-			蓋杯	墨書
232	大畑遺跡	福井市大畑町	H4 包含層	= (墨痕)	外面	-			蓋杯	墨書

第2節 釈文一覧表

ここでは、明治大学データベース（明治大学 2017）に、前節の作業成果を加えて釈文一覧表を作成した（注5）。本稿における遺跡名称は福井県埋蔵文化財遺跡地図に準拠したが、これまでの集成作業（釘谷 2006、明治大学 2017）との整合性を図るため、それら作業で使用されている遺跡名称については、まとめて「別称」として併記した。なお、本稿の対象は墨書土器とし、その他の種類（刻書・漆書・ヘラ書・朱書・押印・人面墨書土器）は対象外とした。

第5表 福井県墨書土器〔足羽郡・丹生郡〕釈文一覧表(1)

【凡例】「 」…文字が完結しているもの。□…判読できないが字数は確認できるもの。〔 〕…判読できないが残画から推測可能なもの。

郡名	第1図 No.	現行遺跡名	別称/分類	人名	職名	舎・家名	地名など	方角	数字	吉祥語	その他	
足羽郡	1	波寄三宅田遺跡	波寄三宅田遺跡	五月女・五百足・木万カ・志豆□カ・吉万		寺・下家	三田・角□カ・翌本			徳	男□カ界□カ・田次丁人・□〔×カ寸カ〕・中山カ中カ・空・稲・幸カ・本カ木□カ・大・大一・□□□〔鬼□カ〕・三月・五月カ 舟	
	2	石盛遺跡	石盛遺跡					北				
	3	黒丸遺跡	黒丸遺跡	□□呂								
			郡遺跡	目黒丸□								
	4	中角遺跡	中角遺跡		山主							
	5	高柳遺跡	高柳遺跡	真国・大万呂・大万呂・龍万呂・真万呂・門女・鱒丸・兵万呂・大□〔万カ〕・太万・真□万呂・国太・貴丸・乙万呂・乙女・井万呂・□万呂・大伴・倉女・染女・生江・佐市カ佐印カ	大・上坐・□長カ・綾生・綾	中家・中□・中臣宅・中・西家・□〔家カ〕	加津・□津カ・日上・野口・田・川・山・井・□□庄名・野太	東	九・十・三・八十□・八十・□二□・□〔万カ〕	尚富	本・太・含・角・乙・薬カ・立・平・文・足・乙乙・□〔人カ〕・□〔守カ〕・□〔自カ〕□・□〔曳カ〕・永カ・黒・半・吉・葉□・若三・■（記号、格子状）	
			高柳町	大								
	6	大和田遺跡	大和田遺跡		大							
	7	東古市縄手遺跡	東古市縄手遺跡				富万呂田				安□・□合	
	8	大宮遺跡	大宮遺跡					北□				
	9	開発遺跡	開発遺跡		大					吉	丸	
	10	吉野塚遺跡	吉野塚遺跡		長						宋	
	11	諏訪間古墳群	東諏訪間1号墳									□〔秋カ〕
	12	浅見金道口遺跡	浅見金道口遺跡			寺・□〔寺カ〕	西方	西				□〔古カ〕・要・☆（記号）
	13	羽坂前田遺跡	羽坂遺跡（羽坂前田遺跡）	稲女								
	14	東大寺領道守荘跡	道守荘遺跡		□〔大カ〕							
	15	福井城跡	福井城跡	櫻浄吉		中家						職・櫻・布
	16	河増遺跡	河増遺跡		万□〔長カ〕			石□				□〔奉カ〕
	17	大畑遺跡	大畑遺跡	真カ		家カ						氣
	18	上古野法善田遺跡	上古野法善田遺跡	□□万呂・枚人・真□□		□寺・寺□	□〔津カ〕			十・万□・万億		全・□〔女カ安カ〕・□〔尾カ屋カ〕
19	和田神明遺跡	和田神明遺跡									屯	
20	和田防町遺跡	和田防町遺跡	弟公・小黒丸・黒万呂・□黒丸・麻呂・秋女・古□	参役女・大	目麻家・中	田・榎本・川邊・井・足原	西				本・□〔木カ本カ〕・執・益□・新	
		和田防町遺跡（和田遺跡）	乙成									

第6表 福井県墨書土器〔足羽郡・丹生郡〕 釈文一覧表(2)

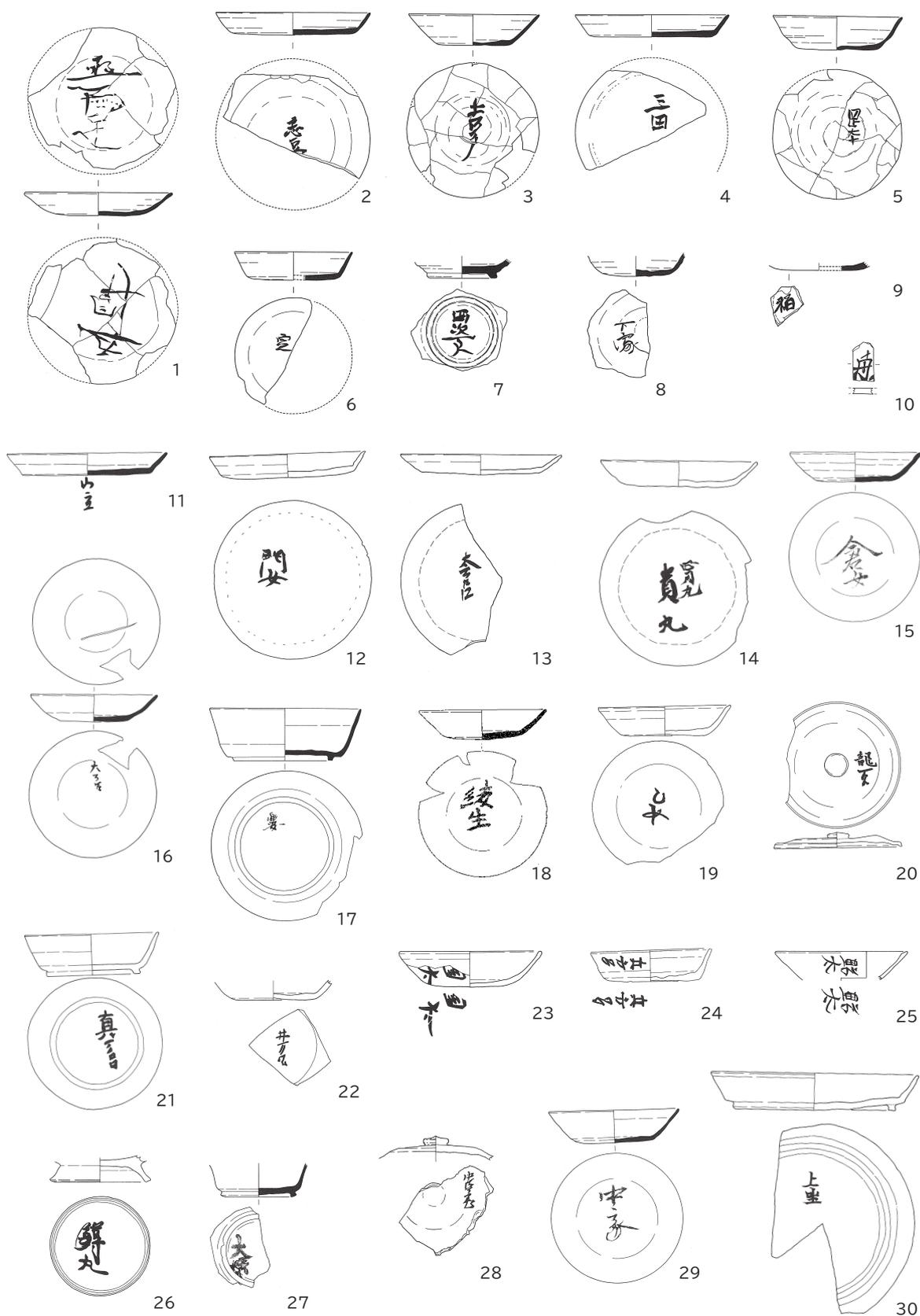
足羽郡	21	小稲津遺跡	小稲津遺跡	古□・□〔越カ〕 君		家□					□〔乍カ〕・小□〔黒カ〕・上□・加□ □□□〔鑑カ〕
	22	下筋生田遺跡	下筋生田畑田遺跡	廣嶋		中	田	東			
	23	今市遺跡	今市岩畑遺跡	枚女・廣刀自・田公・文□〔女カ〕・得成・信万・真・繩女 真公		□〔良カ〕家・中□〔家カ〕・枚	井・豊嶋・中川・□〔盛カ〕田カ		卅二・十・凶	大徳・成	太・冠・秋・安・□〔安カ〕・天・佛・不・為・人足・是・□〔知カ〕・卒
			今市遺跡(豆田地区)		□長						
	24	上筋生田遺跡	上筋生田遺跡(上河北遺跡)	廣□・道麻呂・廣君・乙女・□女・真・麻呂・道□・足女・秦・真官□・宿奈万・黒□□・君	長・大長・大・人長	寺内	田中・凶田・田□・田・荒田・知女田	東	九	儀・豊□・豊・相	足□・足・是□・人□・告・丸足・□人・□〔成カ〕・阿胡
		上筋生田遺跡	道□〔万カ〕・家麻呂・古人	長	中・家・北家	田	東・北・□〔北カ〕	卅□・卅・三・万		阿胡	
丹生郡	25	糞置遺跡	糞置遺跡	□□□〔万呂カ〕・□女・□丸・南丸・南□〔丸カ〕・家□〔継カ〕・助万□・文麻呂・宮□〔女カ〕・吉麻・田□〔丸カ・久カ〕	家人	□〔宮カ〕・□〔前カ〕屋・家・佐々尾寺・東家・南□〔家カ〕	村田・井〔記号「井」カ〕・□〔田カ〕・□田・井・奥□〔田カ〕	西・南□・南・□〔北カ〕□	□〔十カ〕・□〔三カ〕・廿八□	□〔淨カ〕・淨・□〔勝カ〕・□〔福カ〕	治・子□・□〔家カ〕□・□〔眞カ〕□・□〔卜カ〕□・□〔王カ生カ〕□・□〔尾カ〕□・□〔敷カ〕□・□〔助カ〕□・□〔鯛カ〕・□〔京カ享カ〕□・□〔手カ〕□・□〔貫カ貴カ〕□・□〔廣カ〕□・□〔尾南カ〕□・□〔太カ〕□・新・新承・今□・奥六十五・酒田・田□□〔田カ〕・殿・文・本□・宮□
	26	文殊山城跡	文殊山山頂遺跡			寺					
丹生郡	27	大森鐘島遺跡	鐘島遺跡	真成・□成・目丸			御山・石出・石・山本	東・南	万・□万	平	□〔万カ大カ〕・□〔木カ〕・岡大
	28	明寺山遺跡	明寺山麁寺	目丸	守	寺・□宅			萬・万		□〔取カ〕□〔上カ〕・丸
	29	清水山上・下遺跡	清水山遺跡		大						
	30	飯谷在田遺跡	飯谷在田遺跡D地点	□〔女カ〕							□□〔丁カ〕
	31	天神山古墳群	天神山古墳群	繩継□〔公カ〕・嶋依・繩□〔継カ〕	□〔大カ〕		田□〔村カ〕・田	西□□〔南カ〕□〔南カ〕□			和□〔志カ〕□〔繩カ〕
	32	下河端遺跡	下河端遺跡								庚戌
	33	持明寺遺跡	持明寺遺跡	依女・入加万・□□〔木万カ〕・吉丸・家丸・吉女・吉万・□奈□・□万呂・吉□・尿□□〔豆カ呂カ〕□〔皆カ〕麻呂□□〔白成カ〕・山□〔万カ〕・女・□□〔依女〕カ・木万徳・伊賀□□□〔廣良カ〕・石田□万呂・富成・太万・木万・吉万呂カ・泉丸〔万カ〕・刀自・於奈利・日下部大依・□□〔田万カ〕	大・里長・長・大口・大夫	岡寺・東家	今井・□〔郡カ〕□大□□田□□・殿村・木□・大村・野郷・田中・殿	西	廿〔井カ甘カ〕□□万□□〔万カ〕	饒	路・□〔廿四カ苗カ〕□〔發カ〕□〔水カ永カ〕・入・入□・利・依□〔衣カ〕□・川大カ□□〔徳カ〕□〔繩カ〕・奉〔秦カ〕五百千
	34	安丸盲人遺跡	安丸盲人遺跡			□〔家カ〕	□〔下カ〕・下□□下・□中				□〔赤カ〕
	35	光源寺遺跡	光源寺遺跡	毛人		東家□〔東カ〕家・東□〔家カ〕・家□〔家カ〕□家・良家・□〔浄カ〕水寺□□〔家カ〕・上家・北家・室	岡・大西・中□〔野カ〕・中□□□〔石未カ〕	東□・東・西		□〔亀カ〕	□〔客カ〕□・才
	36	国中遺跡	国中遺跡	女							上
	37	芝原遺跡	芝原遺跡	五□丸							主

第7表 福井県墨書土器〔足羽郡・丹生郡〕 釈文一覧表(3)

丹生郡	38	田島屋敷遺跡	田島屋敷遺跡	佐							
	39	丹生郷遺跡	丹生郷遺跡		丹生郷長	五月郷					
	40	高森遺跡	高森遺跡	田万呂		新・中家		東	十		
	41	上太田遺跡	上太田遺跡		司人カ						
	42	平出遺跡	平出遺跡					東			
	43	国府遺跡	国府B遺跡								御□
	44	村国遺跡	村国遺跡	徳成女・佐味・佐□・佐・富吉女・□□〔女カ〕・□吉女・□〔魚カ〕女・佐印	大印	佐家	□田・田□・船津・□〔済カ〕		十・□□〔万カ〕・世		大実・作・鯨・□□〔印カ〕・貞□〔印カ〕
	45	深草鹿寺跡	深草鹿寺								栗
	46	府中城跡	府中城跡B地点	吉女	大	国寺・国大寺・大寺・□寺・国大□	足羽・足・敦	中南・南	二・卅万		寺炊
	47	高瀬二丁目遺跡	高瀬二丁目遺跡						二		
	48	東千福遺跡	東千福遺跡			寺					葛
	49	大屋木ノ下遺跡	大家木ノ下遺跡			新				豊・福	皆
	50	八石遺跡	八石遺跡							□〔福カ〕□	
	51	下ノ宮遺跡	下ノ宮遺跡				桑田郡				
52	大塩向山遺跡	大塩向山遺跡			寺	田		十・□〔十カ〕		大十	
53	山腰遺跡	山腰遺跡	□□〔依女カ〕		國府・國		西			□□〔内カ〕・□〔つカ〕・□〔美カ〕・年・奈・石井・山田	

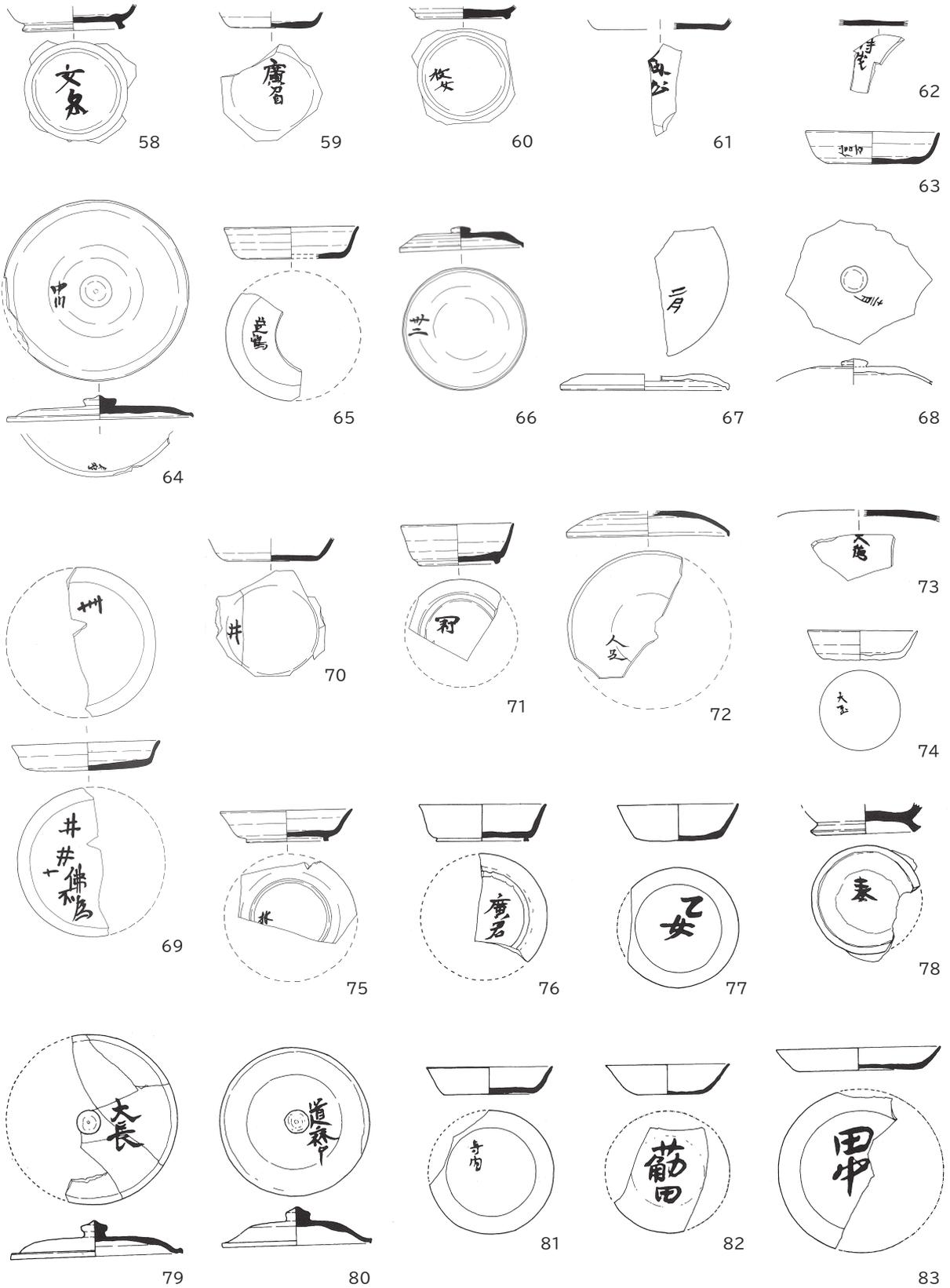
第3節 図版集成

本節では、前節の作業成果をもとに、釈文一覧表で取り上げた特徴的なものや、遺跡の性格を示すもののうち、残画状態が良好なものを、25遺跡から177点を選別して、遺跡毎に掲載する。



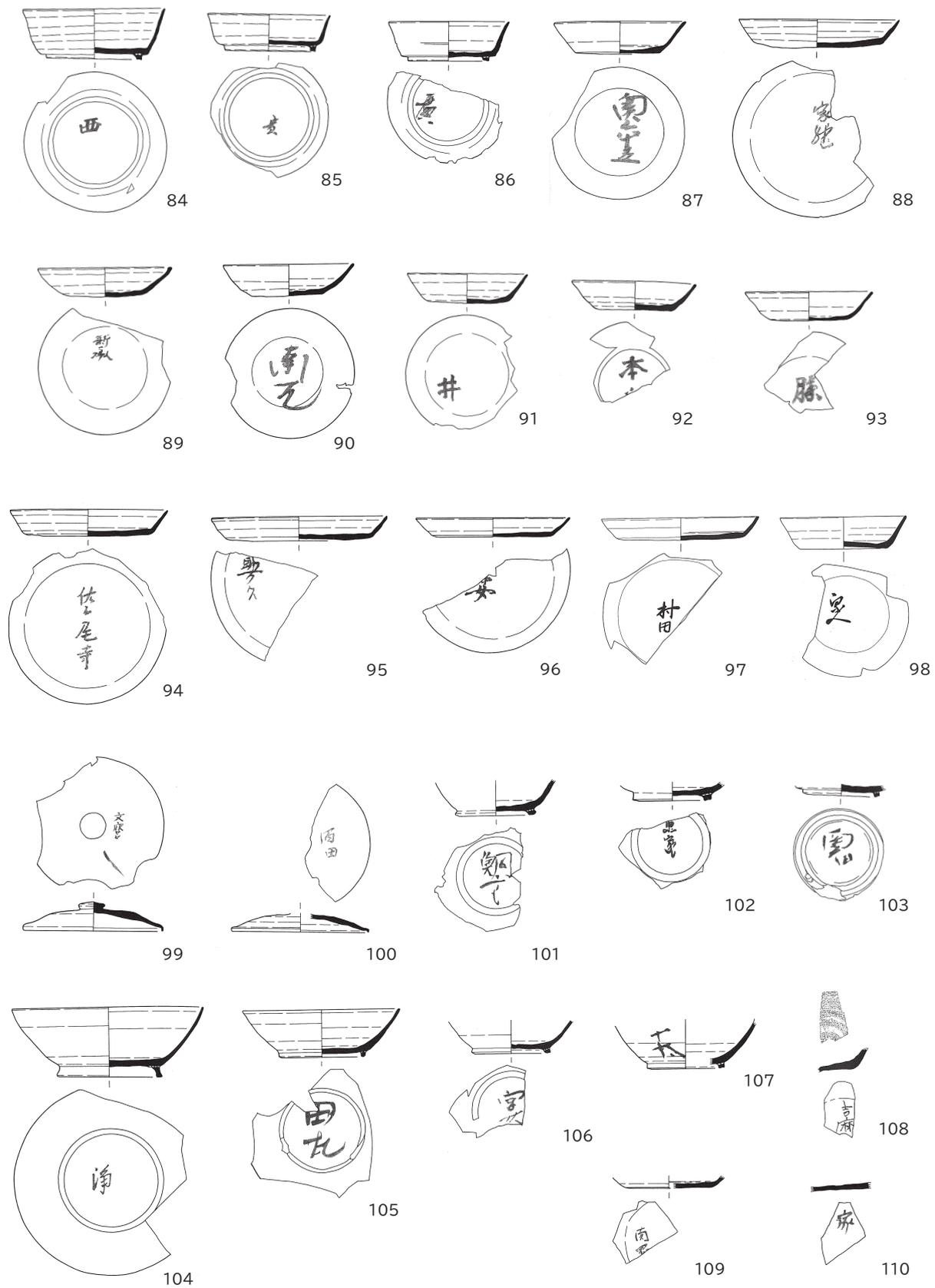
第2図 福井県墨書土器〔足羽郡・丹生郡〕集成 (1) (S=1/6)

1~9 波寄三宅田遺跡、10 石盛遺跡、11 中角遺跡、12~30 高柳遺跡



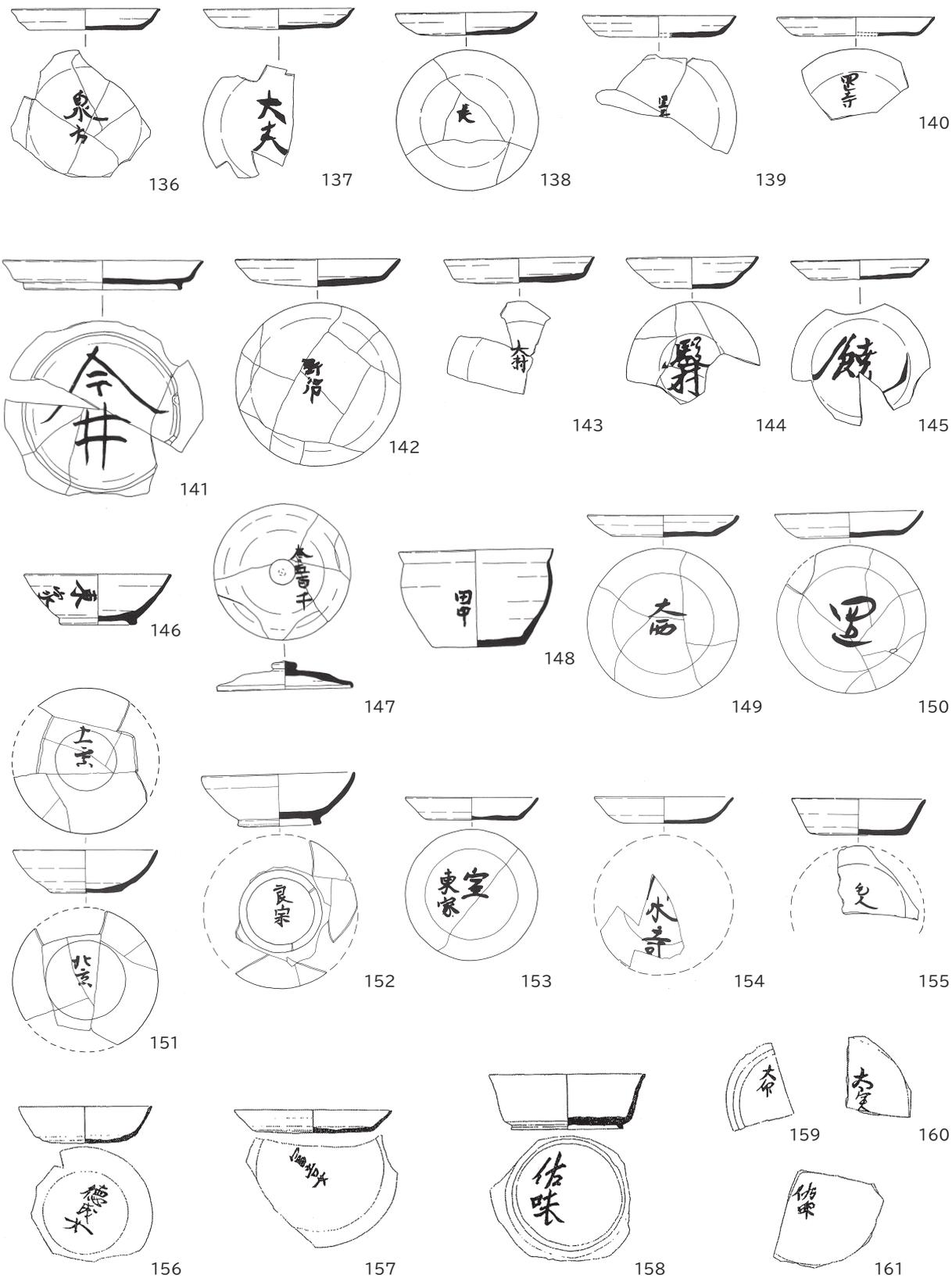
第4図 福井県墨書土器〔足羽郡・丹生郡〕集成(3) (S=1/6)

58~75 今市遺跡、76~83 上筋生田遺跡



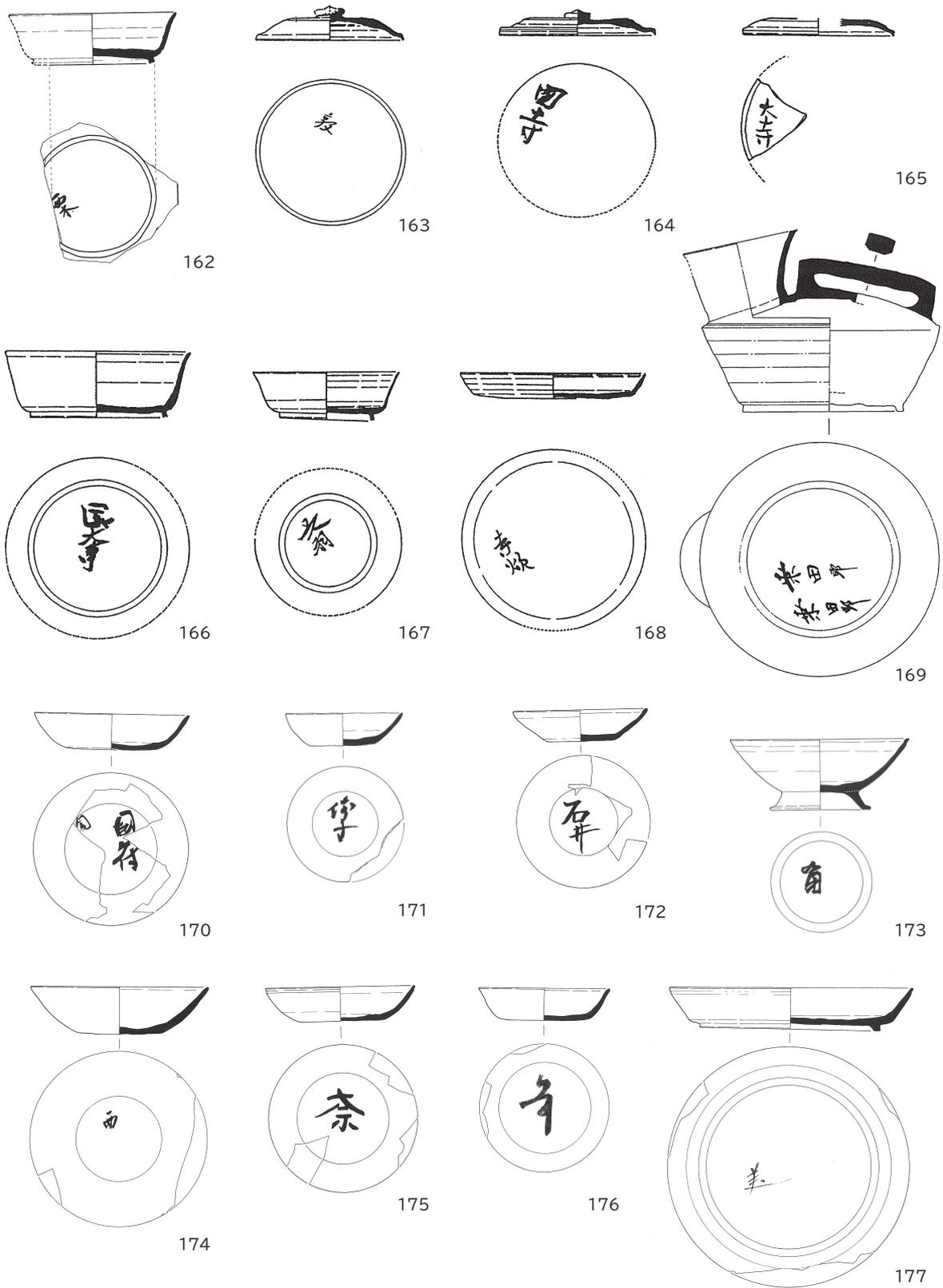
第5図 福井県墨書土器〔足羽郡・丹生郡〕集成(4) (S=1/6)

84~110 糞置遺跡



第7図 福井県墨書土器〔足羽郡・丹生郡〕集成(6) (S=1/6)

136~148 持明寺遺跡、149~155 光源寺遺跡、156~161 村国遺跡



第8図 福井県墨書土器〔足羽郡・丹生郡〕集成(7) (S=1/6)

162 深草麁寺跡、163~168 府中城跡、169 下ノ宮遺跡、170~177 山腰遺跡

第2章 小結

第1節 足羽郡

古代の足羽郡は現在の福井市・吉田郡永平寺町を中心とする。本節では、古代の足羽郡域の遺跡を中心に概説するが、注1でも述べたとおり、一部の丹生郡域（九頭竜川左岸の福井市川西地区）についても、便宜的に本節で取り上げることとする。

(1) 墨書土器の様相（第1表、第2～5図）

明治大学データベースと今回新しく集成したものを合計すると、35遺跡752点であり全て須恵器である（注6）。遺跡別では、高柳遺跡203点、糞置遺跡152点、上筋生田遺跡88点、今市遺跡85点、和田防町遺跡31点、波寄三宅田遺跡28点であり、高柳遺跡と糞置遺跡の両遺跡で足羽郡全体の約半分、これに上筋生田遺跡と今市遺跡を加えると全体の約7割の出土量を占め、4遺跡に墨書土器が集中する特異性を示す。墨書土器に限定すれば、高柳遺跡・上筋生田遺跡・今市遺跡は奈良時代と平安時代の両時期であるが、糞置遺跡・波寄三宅田遺跡は平安時代を中心とする。

丹生郡の資料と比較すると「國」・「國府」・「国大」など国府との関連を推察させる墨書土器は確認されないが、初期荘園の管理・運営など、ひいては物資の生産や交通の管理を目的とした公的機関として評価できる「綾生」・「枚」・「三田」銘墨書のほか、足羽郡域の有力郡領層「生江」銘墨書を確認している。また、糞置遺跡では、寺院の存在を示唆する「佐々尾寺」銘墨書も確認している。墨書土器の器種については、大多数が供膳具（坏・椀・蓋・盤・皿）であるが、特異な事例として今市遺跡出土の鉄鉢形鉢（「井」銘墨書）が挙げられる。

(2) 墨書釈文と遺跡

墨書内容を概観すると、釈文の分類上、数が多い順に「人物」、「地名」、「家名」および「数字」であり、「人物」および「地名」で全体の約半数となる。墨書土器が多数出土した遺跡で、特異な釈文を取り上げて説明する。

(a) 高柳遺跡（第2・3図）

福井市北部域に位置し、縄文時代から古代までの遺構が存在する複合集落である。主な遺構として、弥生時代の四隅突出形を含む周溝墓群、弥生時代および古代の掘立柱建物や溝が挙げられ、墨書土器の多くは、これら溝や土坑から出土した。判読できる墨書には、「大万呂」・「龍万呂」・「真万呂」・「鱒丸」・「貴丸」・「綾生」・「大伴」・「倉女」・「楽女」・「中臣宅」・「真国」・「加津」・「野口」・「生江」・「若三」・「野太」などがあり、人名に関するものが最も多い。

特徴的なものとして、「生江」銘の墨書土器（第3図36）を確認している。文献資料等において越前国では、足羽郡大領正六位上生江臣東人（大日本古文書）、今立郡大領生江臣氏緒（三代実録）、生江臣金弓大野郡司大領（越前国大税帳）など、有力氏族である生江臣の存在を広く認めるところ、本資料は、考古遺物から生江臣を確認できるものとして評価できる。また、「綾生」銘（第2図18）と「綾」銘の墨書土器を計4点確認している。「綾」について、文献からは織機や紡績と関連付けられ、館野和己氏によれば、和銅4（711）年、大蔵省被官の挑文師（注7）が諸国に派遣され錦・綾を織ることを習わせ、結果、翌712年には伊勢・尾張以下21か国で初めて綾・錦の織機が可能となり、その中には北陸道で

唯一越前が入る（館野 2019）。実際、高柳遺跡の発掘調査では、多くの木製紡績具（紡錘車やタタリ台状製品）を確認している（田邊 2011）。また、「綾生」銘墨書の他県における出土事例としては、静岡県御殿・二之宮遺跡があり、遠江国府内またはその近くに紡績関係曹司が存在していた可能性が指摘されている（山中 2004）。そのため高柳遺跡においても、足羽郡衙から約3 km距離をおく別置された曹司の可能性もあるが、大規模な建物群、木簡、硯、官職名や部署名を記した墨書土器など、官衙関連遺跡の諸要素はどれも未確認である。よって、現時点においては、足羽郡の有力氏族＝生江臣による紡績関係の経営拠点と推察する（注8）。

(b) 糞置遺跡（第5図）

福井市南部域に位置し、縄文時代から中世までの遺物を確認している。遺構としては、弥生・古墳時代の建物・方形周溝墓・護岸遺構、奈良・平安時代の溝等を検出し、墨書土器の多くは、この溝や湿地帯から出土した。なお、糞置遺跡の範囲と重複する東大寺領糞置荘に関連する資料と考えられる。判読できる墨書には、「酒田」・「楽女」・「新承」・「殿」・「佐々尾寺」・「浄」などがある。

特筆すべきは「佐々尾寺」銘の墨書土器（第5図 94）である。本遺跡付近には、「佐々尾山」の記載が正倉院絵図（天平神護二年絵図）にあるほか、平安時代の作成と考えられる重要文化財「木造十一面観音立像」が秘仏として祀られている観音堂も位置している。これら要素を総合的に勘案すると、本墨書土器は寺院の存在を示すものと高く評価できる。また、本遺跡でも確認している「浄」銘墨書（第5図 104）が、他県の古代寺院（石川県高尾廃寺跡・滋賀県東光寺遺跡等）から出土している点も、「佐々尾寺」銘墨書土器と古代寺院との関連性を補強するものと評価できる。

(c) 今市遺跡（第3・4図）

福井市南部域に位置し、弥生時代から近世までの遺構が存在する複合遺跡である。弥生時代および古墳時代は方形周溝墓・円墳・方墳が造営された墓域であるが、奈良時代に入ると掘立柱建物・井戸・溝・土坑等を検出し、北陸道に近接する交通に適した場所として集落が形成される。墨書土器の多くは、この井戸・溝・土坑から出土した。判読できる墨書には、「廣刀自」・「田公」・「得成」・「信万」・「枚女」・「縄女」・「真公井」・「豊嶋」・「枚」・「中川」・「天」・「佛」・「人足」・「大玉」などがあり、人名に関するものが最も多い。

特徴的なものとして「枚」・「枚女」銘の墨書土器（第4図 60）を計5点確認している。「枚」は出雲国風土記において、解釈上「牧」と解されている（島根県古代文化センター編 2023）。本遺跡に目を向ければ、平安時代の古代官道である北陸道とみられる遺構も確認しているほか、遺跡付近の浅水地区は古代の駅家である「朝津駅」に比定されるなど、北陸道に近接する交通の要衝としての性格がうかがえる。実際、発掘調査でも、牛馬の下顎骨・頭蓋骨や馬形木製品が出土している。以上の点から「牧」と解し、公的施設である官営牧が存在していた可能性を指摘したい。

(d) 波寄三宅田遺跡（第2図）

福井市北部域に位置し、弥生時代から中世までの遺構を確認している。弥生時代には井戸・土坑・方形周溝墓等を検出したものの古墳時代には自然流路のみとなる。しかし、古代には掘立柱建物・井戸・土坑・溝を確認し、墨書土器の多くは、この掘立柱建物・井戸・溝等から出土した。判読できる墨書には、「五月女」・「五百足」・「吉万寺」・「三田」・「罌本」・「田次丁人」・「空」・「稻」・「大一」などがあり、「田」・「稻」など水稲耕作を想起させる釈文が多い。なお、本遺跡が位置する場所の小字は「三宅田」となっており、それは「三宅（ミヤケ）」に通じ、さらに本遺跡の付近には東大寺領高串荘の比定地となっていることから、

本遺跡で確認された古代の建物群は、荘園の管理・運営や公的機関によって整備された建物群と評価されている。

これら様相の中、特徴的なものとして「三田」銘の墨書（第2図 4）がある。他府県出土の墨書土器を精査すると、滋賀県の事例であるが、隣接する二遺跡（西河原森ノ内遺跡・光相寺遺跡）から、それぞれ「三田」銘と「三宅」銘の墨書土器が出土するなど両銘の強い関連がうかがえる（注9）。この状況を援用し、「三田」銘の墨書土器は三宅（ミヤケ）に通じ、本遺跡の公的機関との評価を補強するものとする。

第2節 丹生郡

奈良時代の丹生郡は、現在の福井県鯖江市・越前市・今立郡池田町・福井市南部域・丹生郡越前町東部域を含む広大な領域を包括していた。そのため、平安時代には、丹生郡から9郷を割いて、今立郡が置かれた。丹生郡は国府所在郡であるが、国府の具体的な場所については確認されていない。ここでは、奈良時代の丹生郡域の遺跡を対象に概説するが、煩雑になることを避けるため、越前町内の遺跡は除外し、福井市南部の遺跡は便宜上、足羽郡の節で触れることとする。

墨書土器については、近年、国府関連遺跡群と称している越前市新善光寺城跡でわずかに増加したが、調査例は多くない。ただ、国府関連遺跡群では毎年発掘調査が継続されており、福井市大森鐘島遺跡でも墨書土器が出土している。

（1）墨書土器の様相（第2表、第6～8図）

これまで報告された墨書土器は、32遺跡430点である（注6）。このうち、越前市国府遺跡から出土した土師器1点を除きすべて須恵器である。ただし、墨書に際し、器質の選択があったわけではなく、越前地域の須恵器生産の特色を示し、都城の比率とは大きく異なる。

遺跡別では、持明寺遺跡137点、村国遺跡100余点（白崎1993、注10）、光源寺遺跡64点、明寺山廃寺36点であり、4遺跡で6割以上の出土量を占める。奈良時代の遺物が中心となる村国遺跡に対し、光源寺遺跡・持明寺遺跡・明寺山廃寺は平安時代の遺物が主体となることから、村国遺跡の特異性が明瞭である。村国遺跡は、郡領層の佐味氏の館として評価される。墨書土器が多く出土する遺跡には寺院やこれに関連する遺跡が多い傾向にあり、上位層の集落で多く出土する傾向にある。

墨書土器の器種については、坏・盤・椀・皿の供膳具が9割以上を占めるが、希少な事例として越前市下ノ宮遺跡出土平瓶（久保1985）や鯖江市持明寺遺跡出土鉢がある。他地域と同様、基本的に墨書は供膳具に対しなされ、甕などの大型品に墨書される事例はない。

供膳具の墨書部位は、底部外面336点、底部内面3点、底部内外両面4点、体部外面5点、詳細不明54点であり、8割以上が底部外面である。このことは、これまでの研究成果（山中2003など）とも整合的である。

（2）墨書積文と遺跡

墨書内容は、人名・職名・施設名・地名・吉祥句のほか、方角や数字などを表していると推測されるものがある。その中でもとくに人名や地名が多いことが特徴である。とくに墨書土器の出土数の多い3遺跡を取り上げ、その概要を記述する。

（a）光源寺遺跡（第7図）

鯖江市南西部から越前市北部に位置する。溝1条、低地部への落ち込みを検出し、墨書土器は多くは、

この落ち込みから出土した。判読できる墨書には、「□（浄力）水寺」・「家」・「上家」・「北家」・「東家」・「大西」・「西」・「室」・「罌」・「毛人」などがある。「方角（または方向）+家」の墨書が多く、また県内他遺跡で確認例の多い人名については目立たないことが特徴的である。

「方角（または方向）+家」墨書は、他遺跡でも出土しており、福井市高柳遺跡で「西家」・「中家」、福井市福井城跡で「中家」、福井市上筋生田遺跡で「北家」・「中家」、鯖江市持明寺遺跡で「東家」、若狭町田名遺跡で「西家」、小浜市西縄手遺跡で「西家」がある。墨書土器の出土比率の比較的高い遺跡から出土する傾向にある。

その他に「 α +家」墨書では、福井市和田防町遺跡で「目麻家」、あわら市細呂木坂東山遺跡で「津家」、村国遺跡で「佐家」、坂井市坂井兵庫地区遺跡群で「路家」、田名遺跡で「乙家」がある。「ウジ名（略字）または人名+家」と「固有名詞+家」の2種があり、前者は私的な施設を含み、後者は公的施設を表現したものと想定する。

一方で、本遺跡の墨書土器を理解する上で、新潟県長岡市八幡林遺跡の事例が参考になる。本遺跡は、古代北陸道に近接する城柵や関、郡大領の館など時間的変遷と共に遺跡の位置付けがなされている。本節と関連する墨書土器では「南家」・「南殿」・「北家」・「北方殿」があり、中心となる四面庇付建物の廃絶に伴い、「南+施設名」から「北+施設名」へ変遷することが明らかになっている。

これらのことから、本遺跡には南側に中心となる建物があり、周囲に計画的に配された建物群があったと推定される。なんらかの公的施設群に仏教施設が付随していたことを推定する。

(b) 持明寺遺跡（第6・7図）

鯖江市西部に位置する。ピットや溝、旧河道を検出し、墨書土器の多くは、この溝や旧河道から出土している。おおむね8世紀前半から10世紀初頭頃まで長期間に及ぶ土器がみられる。ピットは複数検出されたが、建物を復元できるまでには至っていない。

判読できる墨書には、「日下部大依」、「於奈利」、「吉丸」、「家丸」等の人名表記が顕著であり、およそ25種の人名表記がみられ、なかでも男性名が目立つ。人名墨書の少ない光源寺遺跡の様相とは異なる。その他特筆すべきものに「里長」、「長」、「刀自」や「岡寺」、「野郷」、「殿村」、「大村」などがある。以前から「野郷」墨書の出土を根拠として、本遺跡周辺は、『倭名類聚抄』に記載された丹生郡野田郷に比定されてきた（櫛木1993）。「大村」については不詳だが、周辺に存在した村名であった可能性はあろう。

本遺跡周辺には野田郷に居住する「里長」・「刀自」を中心とした複数名で構成する優勢な集落があったことが推定される。「人名」墨書が複数の食器の中から一つを識別するために必要であったならば、供膳具は個人に帰属する銘々器であり、なんらかの単位で集積して管理されていたことが推測される。また、「郷」と「里」と「村」墨書の意味や差異について、注意される。

(c) 府中城B地点（第8図）

越前市中央部に位置する。古代の遺構は検出されていないが、遺物包含層から51点の墨書土器が出土している。出土した須恵器は8世紀後半から9世紀前半に位置付けられる。墨書の中でも「国寺」・「国大寺」・「大寺」や「寺炊」墨書などの出土が特筆される。すでに越前国分寺との関連が指摘されている（釘谷2006）。

釘谷の論考発表後も、出土資料が増加しているが、その傾向は変わっていない。類例を列挙すると、「国寺」は国分寺市武蔵国分寺跡、「大寺」は、野々市市末松A遺跡・関市弥勒寺西遺跡・奈良市大安寺旧境内・

東広島市安芸国分寺跡・肥後国分寺跡・成田市加良部遺跡などから出土し、「国大寺」は本遺跡でのみ出土する（注11）。集落跡から出土する事例も散見されるが、全国的な傾向として国分寺や郡寺などから出土する事例が多い。府中城では、国分寺と関連する明確な遺構が確認されていないため推測の域を出ないが、本地点が越前国分寺を含む箇所には該当する可能性はあろう。

おわりに

本来、墨書土器は遺跡の性格や時期別、さらには分布状況に加え、墨書の部位・字形・割り付けなどの詳細な検討を十分に経るべきところではある。また、集落遺跡の場合、一ないし二字の墨書土器が圧倒的に多く、墨書土器の一点一点を取り上げた場合、それぞれの意味について判断を下す材料がないため、特徴的な墨書を捉え文字内容に力点を置いた検討にとどまり、遺跡単位で概括的に捉える導入的な手法となったことは否めず今後の課題としたい。

付記

- ・ 本報告は、第1章を菅原瑞穂（当センター埋蔵文化財調査員）、はじめに・第2章第1節を川端良招（当センター主任）、第2章第2節を三原翔吾（元 当センター主査、現 石川県教育委員会金沢城調査研究所）が執筆した。
- ・ 福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが2024年に刊行した報告書『糞置遺跡』で、釈文を「瓦」として報告した墨書土器について、注4に記したように小口雅史先生からご指導を賜った。末筆ながら、深く感謝申し上げます。

注

- 1 本稿で対象とする足羽郡と丹生郡の地理的範囲については、古代の行政区分に準じた。しかし、福井市川西地区（波寄三宅田遺跡所在）は、東大寺荘園開田図（越前国坂井郡高串村東大寺大修多羅口分田図案）では坂井郡であるが、2021年に同遺跡に係る報告書が刊行され、多くの墨書土器が出土しているため、今回は足羽郡に含めて集成・分析の対象とした。一方、現在の越前町（旧越前町・旧織田町・旧朝日町）は、平安時代中期の律令の施行細則である延喜式に拠れば敦賀郡伊部郷が旧織田町の織田盆地に比定され、丹生郡・敦賀郡との区割りが明瞭でない点を鑑み、混乱を避ける目的から本稿では対象外とした。
- 2 本稿で使用する遺跡名称は、福井県埋蔵文化財遺跡地図の名称で統一した。
- 3 明治大学データベースは、2016年度迄に発刊した資料を対象としている。そのため、本稿では、2024年度までに刊行された発掘調査報告書を精査し内容をまとめて補遺表を作成した。そのため、補遺期間に含まれるものの報告書の形態でないもの、例えば現地説明会資料や報告会資料などは対象としていないことに留意願いたい。なお、高柳遺跡から出土している墨書土器は全て『高柳遺跡2』に掲載されている。
- 4 2024年に刊行した報告書で「瓦」として報告している釈文について、法政大学文学部 小口雅史教授から「丸」とのご指導を賜っている。そのため、本報告をもって当該報告書の内容を修正する。
- 5 明治大学古代学研究所「全国墨書土器・刻線土器・文字瓦横断データベース」を利用した。同データベース以降は各報告書に拠った。なお、釈文の文字数が一字のみで判読できないものは、一覧表から除外した。
- 6 発掘調査報告書等により、実測図が公表されている土器の数量である。実数は、把握できていない。

- 7 挑文師は律令制で大蔵省織部司の被官。錦、綾、羅などの高級織物の製作を職掌とした。
- 8 高柳遺跡の発掘調査範囲は、区画整理事業および北陸新幹線建設事業に伴うもので限定的である。将来的に、官衙関連遺跡としての諸要素が確認される可能性は高いと考える。また、生江臣を含めた足羽郡の有力氏族の本貫地については諸説ある。水野和雄氏・久保智康氏などは「東の足羽・西の生江」（水野 1972・久保 1984）、釘谷氏は「南の足羽・北の生江」（釘谷 2009）をとる。
- 9 西河原森ノ内遺跡と光相寺遺跡は西河原遺跡群を構成。七世紀から九世紀にかけて存続し、出土遺物や遺構の様相から地方官衙な性格を認める。
- 10 公表されている墨書土器の実測図は 33 点であるが、実際は 100 余点出土したことが知られる。
- 11 明治大学古代学研究所「全国墨書土器・刻線土器・文字瓦横断データベース」を利用した。

引用・参考文献

- 天野 努 2005 「墨書土器からみた古代房総の郷と村と集落・家族」『千葉県文化財センター研究紀要 30 周年記念論集』千葉県文化財センター
- 釘谷 紀 2006 「福井県墨書土器集成」『越前町文化財調査報告書第 2 集 越前町文化財調査報告書』I 越前町教育委員会
- 釘谷 紀 2009 「第 2 節 古代足羽郡の実相」『福井城跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 櫛木謙周 1993 「地方のしくみと役人」『福井県史』通史編 1 原始・古代 福井県
- 久保智康 1984 「篠尾廃寺及び篠尾窯跡出土軒丸瓦の特殊製作技法について」『福井考古学会会誌』福井考古学会
- 久保智康 1985 「皇朝銭を埋納する祭祀の一類型－武生市二階堂町下ノ宮遺跡の検討－」『福井県立博物館紀要』第 1 号 福井県立博物館
- 佐伯有清（編）2015 『日本古代氏族事典』
- 島根県古代文化センター（編）2023 『出雲国風土記一校訂・注釈編一』
- 白崎昭一郎 1993 「文字の普及」『福井県史』通史編 1 原始・古代 福井県
- 館野和己 2019 「天平 4 年度「越前国郡稲帳」を読む」『福井県文書館研究紀要 16』
- 田中 靖 1994 『八幡林遺跡 和島村埋蔵文化財調査報告書第 3 集』和島村教育委員会
- 田中 靖 2005 『八幡林遺跡』IV 新潟県和島村教育委員会
- 田邊朋宏 2011 『高柳遺跡』福井市文化財保護センター
- 中主町教育委員会 1988 『西河原森ノ内遺跡第 4 次発掘調査概要報告書』中主町文化財調査報告書 第 17 集
- 長野市編さん委員会 1997 『長野市誌』第二巻 歴史編 原始・古代・中世 長野市
- 平川 南 1996 「里刀自小論－いわき市荒田目条里遺跡第二号木簡から－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 66 集 国立歴史民俗博物館
- 平川 南 2000 『墨書土器の研究』
- 平川 南 2003 「古代における里と村－資料整理と分析－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 108 集 国立歴史民俗博物館
- 平川 南 2013 「古代の郡家と里・郷」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 178 集 国立歴史民俗博物館
- 福井県武生市教育委員会（編）1998 『埋文たけふ ダイジェスト』No. 2
- 福井県教育庁文化課 1972 『足羽郡足羽町篠尾廃寺調査概要』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『今市岩畑遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告 第 34 集

- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2021 『波寄三宅田遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告 第172集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2021 『高柳遺跡1』福井県埋蔵文化財調査報告 第174集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2021 『高柳遺跡2』福井県埋蔵文化財調査報告 第175集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2024 『糞置遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告 第187集
- 野洲市教育委員会 2012 『平成23年度野洲市内遺跡発掘調査年報』
- 山中敏史 2003 「郡衙による食器管理と供給」『古代官衙・集落と墨書土器－墨書土器の機能と性格をめぐって－』独立
行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所
- 山中敏史 2004 「VI国府」『古代の官衙遺跡－Ⅱ遺物・遺跡編－』独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所

西山窯跡群出土遺物の再整理

中川佳三・木村孝一郎

第1 はじめに

県埋蔵文化財調査センター（以下県埋文）では、令和6年度から文化庁の「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」を活用して、県埋文が保存管理している出土遺物の再整理を進めている。本稿では、県内の越前窯跡調査の中でも一定数の出土遺物量と多くの特殊品が確認されている「西山窯跡群」の再整理結果をもとに、発掘調査の本報告で紹介できなかった越前焼の出土品について報告する。

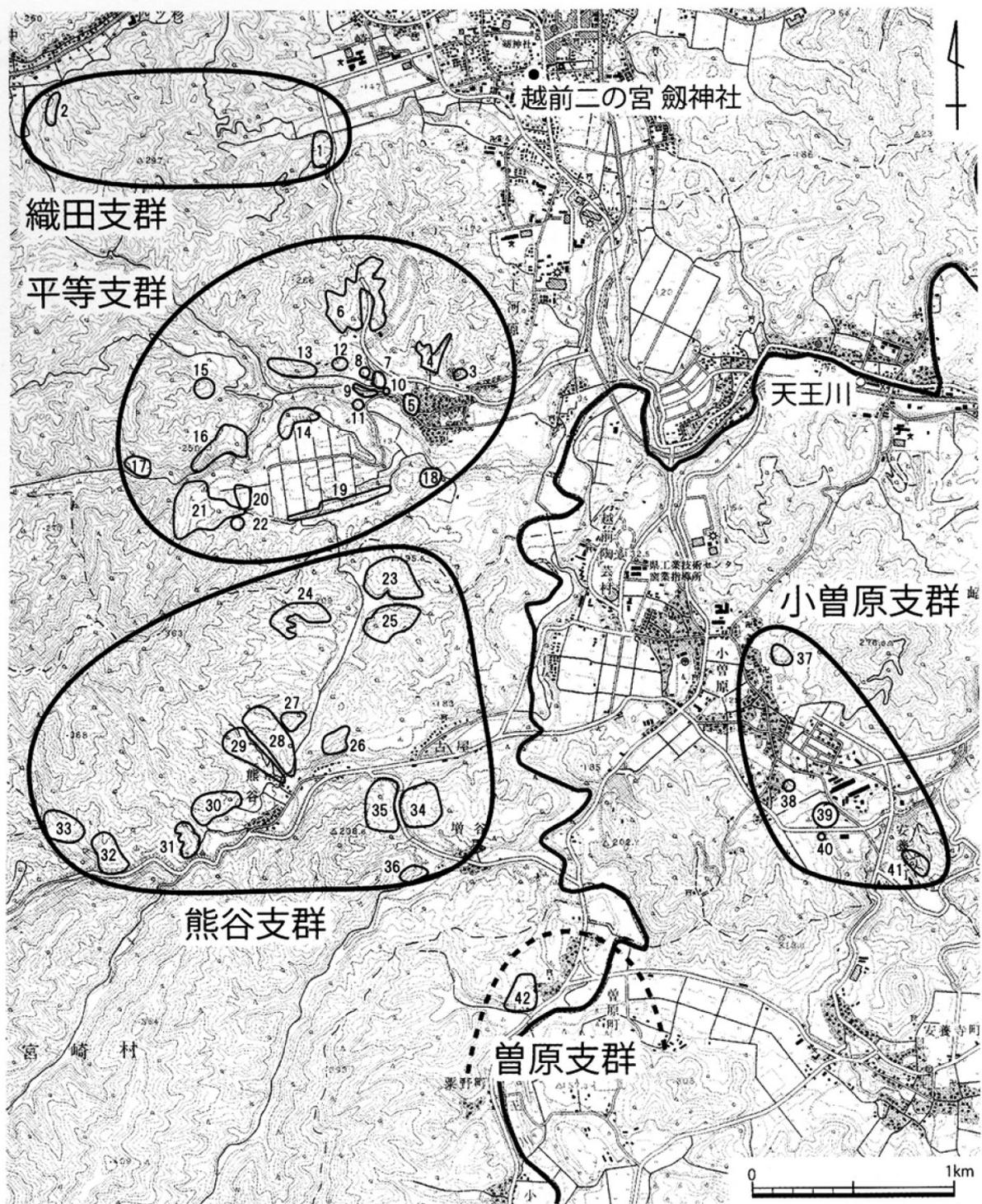
本報告であるように灰原から出土したコンテナバット約900箱の越前焼を観察分類し、甕・片口鉢・壺の個体数（割合）と法量を示した。また、甕は4種類、片口鉢は3種類の規格性のある生産流通品であることも判明した。壺は規格性が認められなかった。個体数を調べるための方法は、口縁部計測法（注1）をもちいて、できる限りの器種と口縁部の分類を行ったのちに計測を行い、甕は757個体（62.9%）、片口鉢は365個体（30.3%）、壺は82個体（6.8%）という数値結果が得られた。（%）の割合は、甕・片口鉢・壺の総個体数から算出したものである。また、甕はA・B・C・Dの4種類（※第3資料紹介参照）の規格化された製品の分類が示され、そのうち甕757個体中、Aは115個体（15.2%）、Bは150個体（19.8%）、Cは391個体（51.7%）、Dは101個体（13.3%）であった。また、片口鉢はA・B・Cの3種類の規格化された製品の分類が示され、そのうち片口鉢365個体中、Aは269個体（73.6%）、Bは81個体（22.3%）、Cは15個体（4.1%）であった。今回、分類された個体数の割合に沿って本報告で図化しきれなかった資料について紹介する。また、調査では焼台や焼成段階で大きく歪んだ製品も一定数認められていたが、本報告では図化や写真等でも取り上げられていなかったため、本稿で改めて図化等で紹介する。

なお、上記の個体数（割合）については、層序や窯との位置関係から西山窯跡群で確認されている3基の窯から排出されたもので、甕等の個体の型式差は認められなかった。

本稿は、第1を中川、それ以外を木村が分担して執筆した。

第2 西山窯跡群について

越前窯跡群は越前町織田・宮崎地区を中心に越前焼を生産した日本海域最大の瓷器系窯業地である。近年170基程もの窯が確認されたが、それらは小曾原・曾原・熊谷・平等・織田支群に属する。織田地区織田と下川原地係に位置する西山窯跡群は織田支群に属し、現在3基の窯を認めるが、平成8年に灰原の調査が実施された結果、大量の越前焼が出土し、未完成の窯跡が検出された。出土遺物は甕・片口鉢を中心に詳細に分析され、甕類の法量の規格性などその様相が明らかにされた。なお製品にはこのほか、蝶や鳥を描いた壺や三耳壺、瓶、水柱、経筒、陶硯、陶錘、人面形陶製品など、消費地であり出土しないものを定量認める。これらを生産した窯は東斜面に位置し、北方から1・2・3号窯となる。2・3号窯の前方には20m四方程を測る平坦面があり、1号窯との間には地山を削った境界を認める。



- 1:西山窯跡群 2:山中窯跡群 3:正信坊窯跡群 4:上平等窯跡群 5:平等劔神社窯跡 6:上平窯跡群
 7:平等北窯跡 8:北釜屋窯跡 9:平等西窯跡 10:葵園 11:口西平窯跡群 12:上鍵谷窯跡群
 13:城ヶ谷窯跡群 14:丸山窯跡群 15:小足谷窯跡群 16:木松郎窯跡群 17:上外ヶ谷窯跡群 18:中平窯跡群
 19:上大師谷窯跡群 20:松尾谷窯跡群 21:大釜屋窯跡群 22:大釜屋窯跡群E 23:奥堂の谷東窯跡群 24:奥堂の谷西窯跡群
 25:下向窯跡群 26:北下向窯跡群 27:大谷窯跡群 28:奥釜井谷窯跡群 29:釜屋谷窯跡群 30:水上窯跡群
 31:上ヶ平窯跡群 32:馬戸窯跡群 33:カマハナ窯跡群 34:フスベ窯跡群 35:漆谷窯跡群 36:上垣内窯跡群
 37:上長佐窯跡群 38:土屋2号窯跡群 39:土屋1号窯跡群 40:暮掛窯跡群 41:奥蛇谷窯跡群 42:曾原鼻谷窯跡群

第1図 越前窯跡群の窯跡分布図 (縮尺 1/30,000)



第2図 西山窯跡群の窯跡分布と平成8年度調査区（縮尺 1/2,500）

平成 25 年に越前焼総合調査事業に伴い調査が実施され、結果、他所の瓷器系窯跡群同様、丘陵斜面を掘削して燃烧部・烧成部・煙道部を構築し、分焰柱を持つ地下式窖窯であると確認された。窯の規模は、1号窯は分焰柱先端から煙道部まで 14 m で烧成部最大幅 3 m、2号窯は分焰柱先端から煙道部まで 12.5 m 程を測るものである。2号窯は表面観察だが、烧成部最大幅 2.5 m 程で 1号窯よりも規模が小さい。

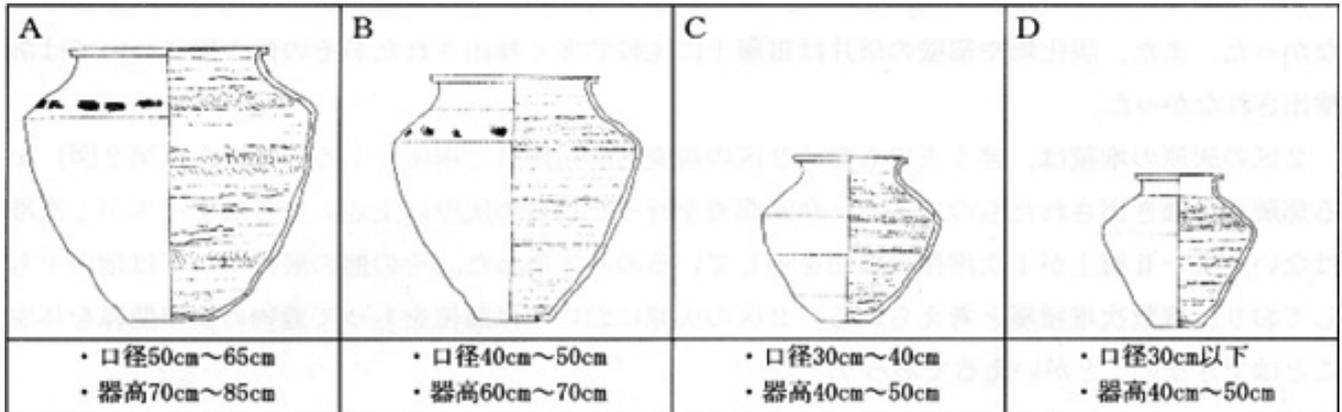
第3 資料紹介（第4・3図、表1・2）

出土遺物の甕は法量により A～D 類に分類されているため、この分類に基づき資料紹介を行う。遺物は甕 8 点、烧台 4 点図化し、そのほかを写真で示した。

1 資料1（第4図・写真1）

B 類の甕で、口径 48.8 cm、底径 19 cm、器高 62.4 cm、胴部最大径 72.6 cm を測る。器形はやや内側に伸び上がりやや外反する頸部から直線的な肩へ続き、体部から底部に至る。端部が内側にすぼむ口縁部は幅 2 cm の縁帯を持ち、端部を摘み上げる。成形は粘土紐輪積みで内面に接合痕を認め、肩部には指押さえの痕が顕著に残る。外面の成形痕は横ナデのため鮮明でない。外面に濃緑色の自然釉がやや厚く肩部から体部にかけて流れ、口縁・底部内面に降灰を認める。胎土は細かく密、色調は内外面とも褐色を呈し、烧成は良好である。体部は烧成段階で大きく破損し、肩部から底部にかけてき裂が縦にはいる。

2 資料2（第4図・写真2）



第3図 西山窯跡群出土甕分類図

B類の甕で底径は不明だが、口径 47.8 cm、残高 64.4 cm、胴部最大径 71.6 cmを測る。器形はやや内側に直線的に伸び上がる頸部から直線的な肩へと続き、体部から底部に至る。端部が内側にすぼむ口縁部は幅 2 cmの縁帯を持ち、端部を摘み上げる。成形は粘土紐輪積みで内面に接合痕を認め、肩部には指押しえの痕が顕著に残る。外面の成形痕は横ナデのため鮮明でない。肩部と口縁内面に降灰を認める。胎土は細かく密、色調は内外面とも褐色を呈し、焼成は良好である。

3 資料3 (第4図・写真3)

C類の甕で、口径 31.2 cm、底径 14.8 cm、器高 44.5 cm、胴部最大径 47.8 cmを測る。器形は直立する頸部から直線的な肩へと続き、体部から底部に至る。内面に凹線が巡る口縁部は幅 1.4 cmの縁帯を持ち、端部をやや外側に薄く摘み上げる。成形は粘土紐輪積みで内面に接合痕を認める。外面に接合痕と木篋による縦方向の成形痕が残るなど、ほかの資料と比べ横ナデはあまり丁寧でない。胎土は大粒の砂粒も認めるが、細かく密である。色調は灰褐色の肩部と頸部内面を除いて褐色を呈し、焼成は良好である。

4 資料4 (第4図・写真4)

C類の甕で底径は不明だが、口径 33.8 cm、残高 46.6 cm、胴部最大径 51.8 cmを測る。器形はやや丸味を帯びつつ伸び上がる頸部から直線的な肩へと続き、体部から底部に至る。内面の凹線は不明瞭だが、口縁部は幅 1.4 cmの縁帯を持ち、端部を摘み上げる。成形は粘土紐輪積みで内面に接合痕を認め、肩部には指押しえの痕が顕著に残る。外面の成形痕は横ナデのため明瞭でない。外面の肩部から体部に認める自然釉は焼成の具合で溶けずに発色が不十分な部分もあるが、口縁・底部内面の一分に厚くかかる。胎土は細かく密、色調は内外面とも褐色を呈し、焼成は良好である。肩部に細い線刻の刻画文がある。

5 資料5 (第4図・写真5)

C類の甕で底径は不明だが、口径 31.8 cm、残高 46.8 cm、胴部最大径 47.8 cmを測る。器形は開き気味に外反して伸び上がる頸部から直線的な肩へと続き、体部から底部に至る。内側に凹線が巡り、端部が下がる口縁部は幅 1.6 cmの縁帯を持ち、端部をやや外側に薄く摘み上げる。成形は粘土紐輪積みで内面に接合痕を認める。外面の成形痕は横ナデのため明瞭でない。自然釉は肩部と口縁内面に薄くかかる。胎土は細かく密、色調は灰褐色の肩部、口縁・底部下半内面を除いて褐色を呈し、焼成は良好である。

6 資料6 (第4図・写真6)

D類の甕で、口径 27.2 cm、底径 15.8 cm、器高 45.2 cm、胴部最大径 43.3 cmを測る。器形は直立する頸部から丸みのある肩へと続き、体部から底部に至る。端部がやや下がる口縁部は幅 1.6 cmの縁帯を持ち、

端部をやや外側に薄く摘み上げる。成形は粘土紐輪積みで内面に接合痕を認める。外面の成形痕は横ナデのため明瞭でない。外面の口縁部から底部にかけて濃緑色の自然釉が厚くかかる。胎土は細かく密、色調は内外面とも褐色を呈し、焼成は良好である。底部に焼台が付着し、その上方に位置する1段目の接合部分が横方向に破損する。底部にはさらに2つ焼台の痕跡を認める。

7 資料7 (第4図・写真7)

D類の甕で、口径24.8 cm、底径15.4 cm、器高38.6 cm、胴部最大径40.6 cmを測る。器形は屈曲する頸部から丸味のある肩へと続き、体部から底部に至る。受け部がない口縁部は幅1.4 cmの縁帯を持ち、端部を外側に強めに摘み上げる。成形は粘土紐輪積みで、内面の接合痕は明瞭でないが、肩部には指押さえの痕が残る。外面は体部に木篋による成形痕が残る。自然釉は肩部と口縁部・底部内面に薄くかかる。胎土は細かく密、色調は外面が褐色、内面が黄褐色を呈し、焼成は良好である。

8 資料8 (写真8)

体部から底部が歪んだC類の甕で、口径30.4 cm、底径14.8 cm、器高43.8 cmを測る。器形は直立気味な頸部から直線的な肩へと続き、体部から底部に至る。内面に凹線が巡る口縁部は幅1.4 cmの縁帯を持ち、端部を摘み上げる。成形は粘土紐輪積みで内面に接合痕を認め、肩部には指押さえの痕が顕著に残る。外面の成形痕は横ナデのため明瞭でない。外面の口縁部から底部にかけて濃緑色の自然釉が厚く簾状、口縁・底部内面、破損断面に薄くかかる。胎土は細かく密、色調は内外面とも褐色を呈し、焼成は良好である。体部には円形状の製品が付着した痕があり、底部に長さ0.0 cm、幅0.0 cmの焼台が遺存する。底部にはさらに1つ焼台の痕跡を認める。数か所のき裂が肩部から底部にかけて縦にはいる。

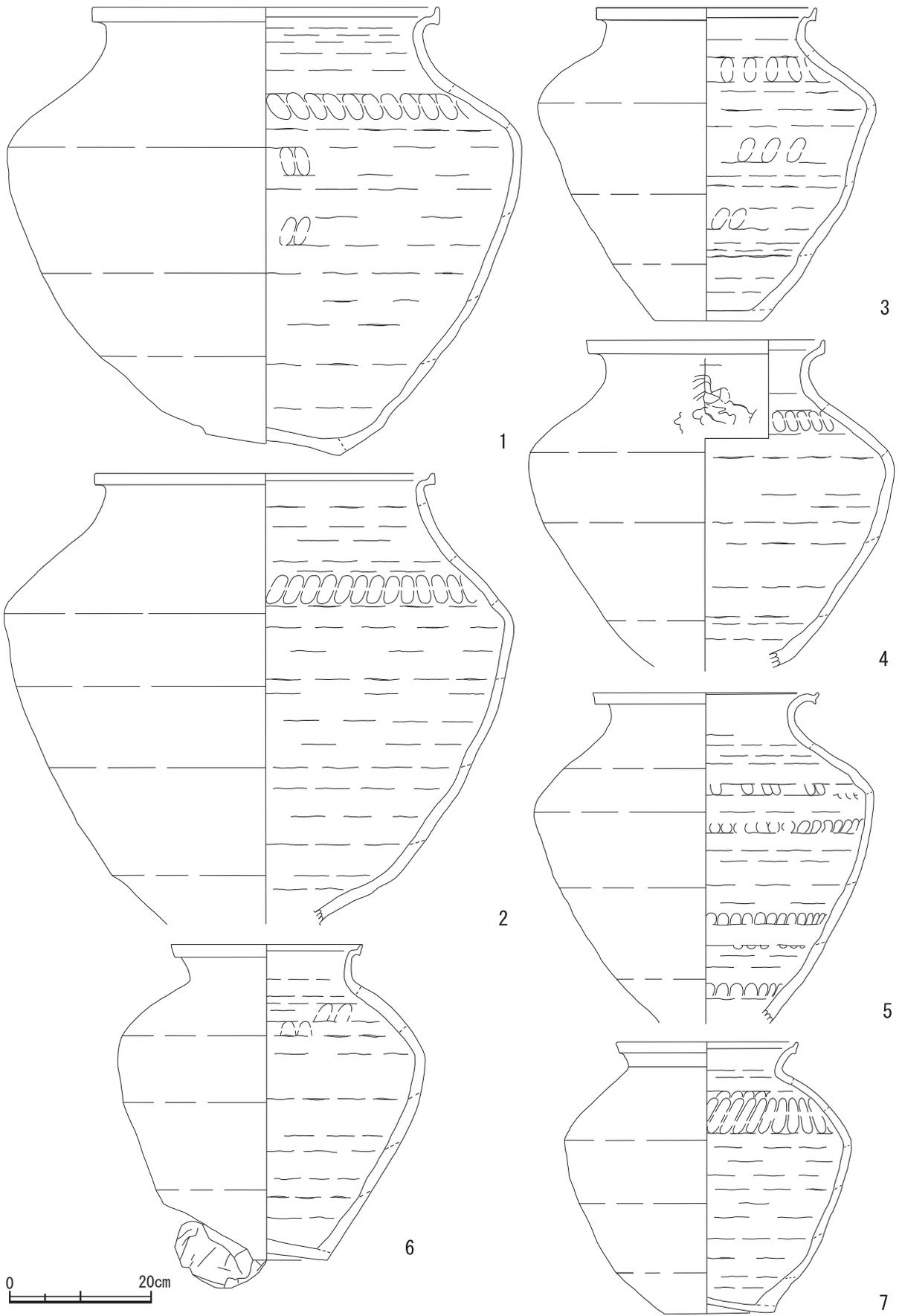
9 資料9・10・11 (写真9・10・11)

資料9～11とも歪みが大きい。資料9はC類の甕で、口径34.6 cm、底径15.8 cmを測る。器形は直立気味な頸部から直線的な肩へと続く。内面の凹線は不明瞭だが、口縁部は幅1.2 cmの縁帯を持ち、端部を摘み上げる。成形は粘土紐輪積みで内面に接合痕を認め、肩部には指押さえの痕が残る。外面の成形痕は横ナデのため明瞭でない。外面の肩部に濃緑色の自然釉が薄く、体部・底部内面・破損断面に厚くかかる。胎土は細かく密、色調は内外面とも赤褐色を呈し、焼成は良好である。肩部に大きな窯糞が付着する。底径16.2 cmを測る資料10はD類の甕で、器形や成形痕、胎土、色調、焼成の特徴は資料9と同じで、外面の口縁部から肩部にかけて濃緑色の自然釉が厚く、底部内面に薄くかかる。9・10より大きく歪む資料11もD類の甕で各部位の法量は計測できないが、口縁部は幅1.4 cmの縁帯を持つ。それぞれの特徴は前2者と同じが、外面の肩部と内面にかかる自然釉は薄く、剥落している。これらの資料は破損断面に自然釉を認めることから、焼成段階に破損したと思われる。

以上、甕の紹介を終えるが、これらの資料は全て前記した甕の法量に当てはまることが理解できる。さらに報告書の指摘のとおり、C・D類の甕は、頸部が「く」字状に屈曲する資料7、頸部が直立気味な資料3・4・6に加え、丸みのある肩を持つものなど、古い属性を認めることが注目できる。

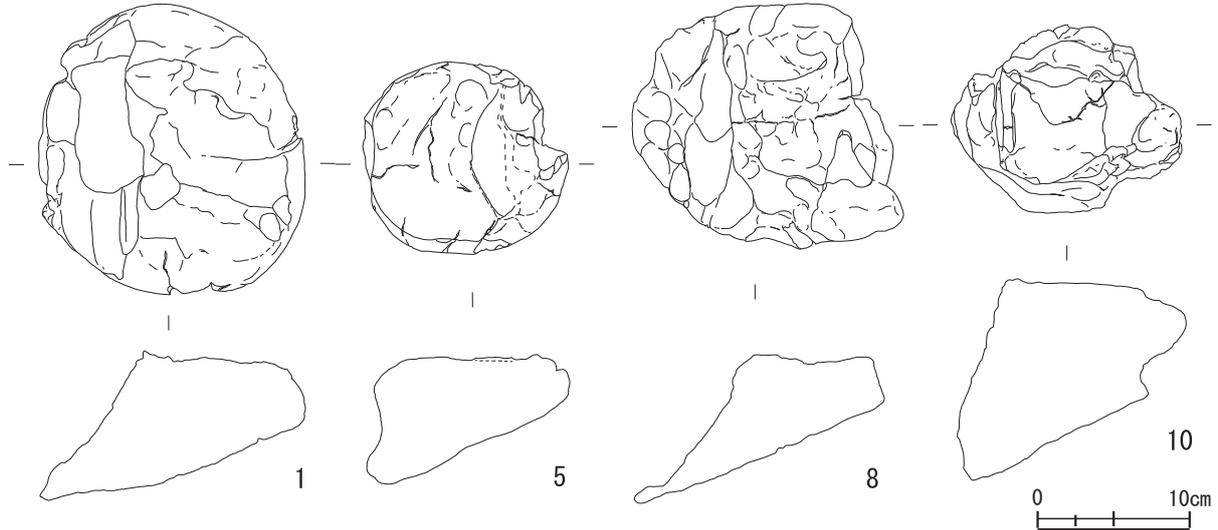
10 焼台 (第5図、写真12～21)

焼台は製品を水平に据えるために焼成部床面と製品の底部間に設けるものである。床面に平行に置いたもの10点中4点を図化し、残り6点を写真で示した。平面形態は略円形、略方形、不製円形・不整方形、不整三角形など様々で、法量は概ね長さ16 cm以上で幅15～12 cmを測る大型品と長さとも10～14 cm程の小型品に分かれる。大型品は資料1・2のように断面が山形状で、製品を置く上部と焚



第4図 西山窯跡群出土遺物1 (縮尺 1/8)

口に伸びる部分に面を形成するものが多い。焚口側の面は床面に据える際に前方に伸ばされて形成されたもので、指押さえの痕を顕著に認めるが、資料9などのように木製の道具によると考える方形状の痕跡のあるものもみられる。小型品は資料5のように上部が平坦で、焚口側が強くへこんで直立気味なものがある。なお資料5の上部には円形状の甕か壺の底部片が付着する。焼台は上部を水平に据えることで焼成部の床面傾斜が想定可能で、例えば1号窯出土の資料9、2号窯出土の資料10は約25度を測り、



第5図 西山窯跡群出土遺物2 (縮尺 1/5)

第1表 越前焼甕観察表

番号	写真	法量	縁帯幅 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	胎土	焼成	出土位置	備考
1	1	B	2.0	48.8	19.0	62.4	72.6	密	良	2区 D11、I層	
2	2	B	2.0	47.8	—	残 64.4	71.6	密	良	2区 D12、I層	
3	3	C	1.4	31.2	14.8	44.5	47.8	密	良	2区 C6、IV層	
4	4	C	1.4	33.8	—	残 44.6	51.8	密	良	2区 C10、I層	刻画文
5	5	C	1.6	31.8	—	残 46.8	47.8	密	良	2区 C7、II層	
6	6	D	1.6	27.2	15.8	43.8	43.3	密	良	2区 C11、I層	焼台付着
7	7	D	1.4	24.8	15.4	38.6	40.6	密	良	2区 D5、III中層	
8	8	C	1.4	30.4	14.8	43.8	—	密	良	2区 C9、灰原	焼台付着
9	9	C	1.2	34.6	15.8	—	—	密	良	2区 C10、I層	
10	10	D	1.2	—	16.2	—	—	密	良	2区 C11、I層	
11	11	D	1.4	—	—	—	—	密	良	2区 D5・6、II層	焼台付着

第2表 焼台観察表

番号	写真	法量	長さ (cm)	幅 (cm)	平面形	表面断面	裏面断面	出土位置	備考
1	12	大	18.8	18.0	略円形	山形状	平坦	2区 C8、I下層	表面：線状痕・指頭圧痕
2	13	大	残 19.5	17.2	略方形	山形状	平坦	2区 D12、I下層	表面：指頭圧痕
3	14	大	残 16.4	残 15.4	不整形	山形状	平坦	2区 C9、灰原 1	表面：指頭圧痕
4	15	小	14.6	15.8	不整形	山形状	平坦	2区 CD2・3	表面：指頭圧痕
5	16	小	残 14.5	12.6	不整円形	平坦	平坦	2区 C8、I下層	表面：陶片・自然釉付着。裏面：床面付着
6	17	小	残 12.6	13.6	不整円形	平坦	平坦	2区 C11、I下層	焚口側側面へこむ
7	18	小	11.4	12.4	略円形	丸形状	平坦	2区 C10、トレンチ	表面：指頭圧痕
8	19	大	残 18.4	16.8	略方形	山形状	平坦	1号窯	表面：線状痕・指頭圧痕
9	20	小	残 14.0	10.4	不整三角形	丸形状	平坦	1号窯	表面：指頭圧痕
10	21	大	残 17.0	12.0	略方形	山笠状	平坦	2号窯	表面：指頭圧痕

調査で判明した両窯の焼成部床面傾斜 25 度、28 度とほぼ同様である。また灰原出土の焼台も図化した資料 1・5 などほぼ同じ角度を示す。なお大型品と小型品が製品別に使い分けられたか否かは明確にし難いが、甕 C 類の資料 6、甕 D 類の資料 8 に付着している焼台は長さ、幅とも 12 cm に収まる小型品のため、甕 A や B 類、法量の大きい壺に大型品、甕 C や D 類、法量の小さい壺、片口鉢に小型品が使用された可能性がある。今後の資料増加に伴い、再度検討していきたい。

第4 おわりに

本稿では出土遺物の再整理で得られた甕と焼台を紹介した。結果、甕は法量が正報告で示された分類の範疇に収まることがわかり、それを補強することができた。焼台は窯跡および灰原出土遺物とも図化した。試掘調査で得られた 1・2 号窯の焼成部床面傾斜とほぼ一致することを指摘できた。このことは焼台が窯構造の属性の一つの床面傾斜を反映するものであることを示し、中世窯構造の研究に寄与する資料である可能性を物語る。今後は他窯跡群出土の焼台も含めた検討が必要である。

注

- 1 宇野隆夫 1992 年、「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 40 集・岩田隆 1992 年、「個体数について」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』第 5 回北陸中世土器研究会

参考文献

- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1999 『西山窯跡群』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2016 『越前焼総合調査事業報告』







12

13

14



15

16

17

18



19

20

21

〔資料報告〕

林・藤島遺跡（泉田地区）から出土した 弥生時代鉄製鋸の可能性のある資料

林・藤島遺跡出土鉄器検討ワーキンググループ
（魚津知克・木村孝一郎・佐々木芽衣・中川佳三）

はじめに

本稿では、令和3年度における福井県林・藤島遺跡出土品保存修理事業（文化庁国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金）の実施過程で判明した、弥生時代鉄製鋸の可能性のある資料の概要を報告する。

この資料は、弥生時代の鋸ならば初めての類例である。そのため、考古学及び建築技術史学の複数の専門家によるご指導を仰ぎつつ、慎重に検討を進めてきた。

細部の解釈や評価については、必ずしもご意見が一致しているわけではない。ご指導を踏まえながらも、あくまで埋蔵文化財調査センター職員で構成されるワーキンググループが所見をまとめたのが、本報告である。事実関係や解釈の誤りがあれば、文責は当グループにあることをご了解いただきたい。

1. 資料報告の経緯

林・藤島遺跡（泉田地区）は、九頭竜川南岸の福井市泉田町に所在する。県道大畑松岡線道路改良工事に伴い、平成8年～平成15年に当センターによる発掘調査が実施された（第1図）。その結果、弥生時代後期の玉作工房を伴う大規模な集落が確認され、土器、石器、鉄器、木器といった多種多様な遺物が出土した（富山編2009）。

なかでも、玉作に関連する出土資料が注目される。これらは、穿孔具を中心とした多くの鉄製工具が含まれ、鉄器化による玉作の拡大や、日本海側での玉類流通の進展を示す、大きな意義を持つものである。貴重な考古資料として評価され、出土品のうち944点（注1）が、平成26年に国の重要文化財に指定された（8月21日官報号外第187号 文部科学省告示第109号）。

その後、鉄製品等の劣化が懸念されたため、令和3年度から、文化庁美術工芸品重要文化財修理事業国庫補助金の対象として、保存修理を実施することとなった。初年度は、63点の金属製品について、公益財団法人元興寺文化財研究所が保存修理を担当した。

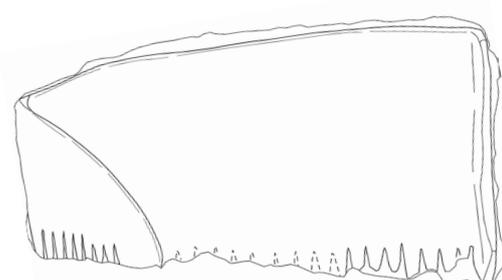
保存修理の過程で、X線透過画像を撮影したところ、鉄製品1点に鋸歯が明瞭に観察された。本資料は、発掘調査報告書では「鋸歯が刃部すべてにある鎌」（富山



第1図 林・藤島遺跡（泉田地区）の調査
（西から）



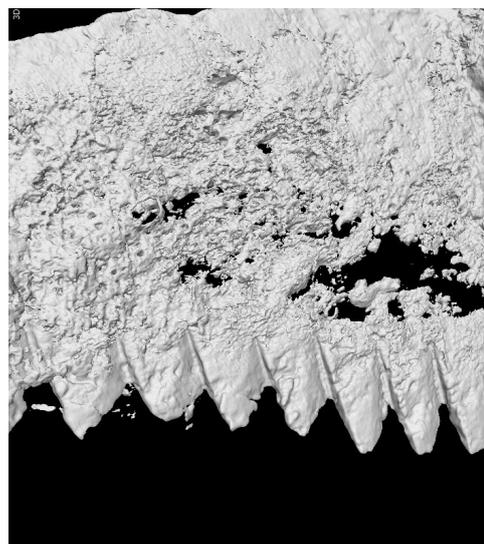
第2図 資料写真（保存修理後）（1.5倍）



第3図 実測図（1.5倍）



第4図 X線透過画像
（福井県工業技術センター提供）



第5図 X線CTスキャン 拡大画像（1）
（福井県工業技術センター提供）

編 2009 p.411) とされていたものの、細部が明確に図示されていなかった。X線撮影によって、はじめて鋸歯の状況が明らかになった。

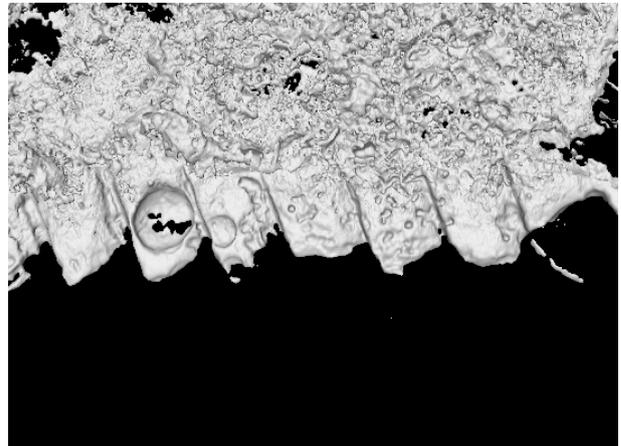
詳細な観察を行うため、令和4年4月、福井県工業技術センターへ依頼し、当センター職員の立会のもとX線透過画像の再撮影（第4図）及びX線CTスキャン画像の撮影（第5図・第6図）をおこない、新たに多くの知見を得ることができた。

併行して、考古学及び建築技術史学において高い学識を有する研究者に、専門的見地からのご指導を

仰いだ（注2）。その結果、本資料は鉄製鋸として評価することが可能であるとの所見をいただき、中国大陸や朝鮮半島での関連資料についてもご教示を得た。

2. 資料の概要

前章で触れたように、本資料は、発掘調査報告書（富山編 2009）に記載がある。折り返しを復元した状態での実測図が示され（p.414 第273図 35）、鉄製品一覧表にも記されている（p.417 第19表）。ただし、今回検討した結果、報告書一覧表で実測図番号等と併記される出土地や層位（注3）と、資料自体のマーキング内容とに齟齬があることが判明した。齟齬の原因について検討したものの、残念ながら判然としない。本稿においては、資料自体のマーキングを優先させ、B7グリッドIX層からの出土と認識する。この出土地や層位は、報告書の鉄製品一覧表では直上の行に記されている。いずれの場合でも、弥生時代遺物の包含層からの出土である点には変更がない。



第6図 X線CTスキャン 拡大画像（2）
（福井県工業技術センター提供）

保存修理後の現状は、第2図から第5図の通りである。長さ4.1cm、最大幅2.1cm、厚さ1mmを測る。先端から1.6cmほどの部分が、60度ほど折り返されている。折り返された部分を元に戻すと、上辺が先細りの曲線で下辺は水平となり、長さ5.7cmほどのくちばし形として復元できる。

基部側の端辺は、全体を90度近く折り返される。折り返し近くまで歯があるので、当初からこの形態ではなく、もっと長かったものが廃棄時まで欠けたと見なすべきであろう。両側が折り返されるのは、意図的な印象を受ける。欠けた後に、何らかの用途に供するため折り返したのかもしれない。

以上より、本資料の復元長が5.7cmをこえるのは確実である。しかし、どこまで延びていたのかは確定しがたい。ただし、次章で示すように、もとの長さを推測できる類例が存在する。

歯は下辺に施され、先端側に傾く三角形を呈する。本来の先端から約1cmには歯はない。歯の間隔にはやや粗密がある。X線写真に基づく、1cmあたり5～7枚となるが、折り返しの影響で一部を斜めに撮影しており、高めの数値が出る傾向にある。1cmあたり5～6枚とするのが妥当であろう。歯の深さは、1～3mm程度である。こちらもばらつきがある。一部の歯は錆化等で削れており、当初からこれほどの差異があったかは確定しがたい。

それぞれの歯には、先端側の辺からのびる形で、数mm程度の切れ込みが入る。切れ込みは、鑿状工具で表面のみに施される。併せて、歯の基部側を斜めに面取りし、切れ込みに接続する。

第6図を見ると、左から2番目の歯に気泡状の穴がちょうど収まっており、大変興味深い。穴の左側にある切り込みの鑿痕について、微調整をおこなったようにも観察される。製作時に、素材に存在した気泡状の穴が意識された結果だと考えられる。

3. 本資料の評価

(1) 出土状況

1. で記したように、本資料は、弥生時代後期後半の遺物包含層(B 7 グリッドIX層)から出土している。

この層は遺構確認面でもあるが、本資料自体は遺構からの出土ではない。そのため、所属時期を決定する根拠については、十全ではないといわざるを得ない。ただし、直上のVIII層は、厚さ 20cm 以上の弥生時代遺物包含層である(富山編 2009 p.12 第5図)点をふまえると、上層からの混入は考えづらい。IX層からは、刀子・鑿状・棒状といった鉄製工具も出土している。本資料については、弥生時代後期(後葉から末)に属する(注4)と考えるのが素直であろう。

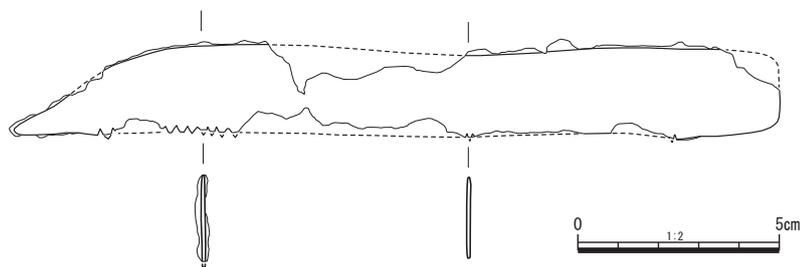
(2) 形態的特徴

2. で記したように、本資料は、全体が先端の尖るくちばし形を呈し、切れ込みが伴う三角形の歯を持つといった特徴がある。これまで、日本列島への導入期の類例として知られてきた、古墳時代前期に属する鋸(第8図)の多くは、外形が長方形で、歯は台形となる。本資料と比べると、形態的に大きな差異が認められる。

ただし、外形については、少数ながら、この差異を埋める前期古墳資料が存在する。福岡県久留米市福聚寺7号墳3号主体部副葬の鋸(第7図2 以下、福聚寺鋸)であり、組合式木棺小口外側の墓壇内に、斧・鑿・刀子・鑿といった鉄製工具各1点や銅鏃2点とともに副葬されていた(小澤編 2005)。共伴する鉄製工具・銅鏃の様相から、古墳時代前期中葉のものと考えられる。全長 19.1cm、幅 2.4cm、厚さ 0.1 cmを測り、先端が尖るくちばし状の全形を呈する(注5)。歯からの斜めの切れ込みは、X線写真では認められないものの、歯の密度や深さは本資料と類似する。基部は、長方形のやや幅広の茎状と考えられる。ただし、刀子と錆着しており、細部の復原は容易ではない。

一方、本資料のように、鋸鎌のような形態の歯を持つ古墳時代の鋸については、なお類例が知られておらず、この点では、本資料の特異性は解消しきれていない。ただし、本資料については、X線CTスキャン画像撮影によってはじめて歯の細部が認識できた点を注意しておきたい。古墳時代鉄器を対象とした

X線CTスキャン画像撮影は、甲冑(橋本 2017・2018)や馬具(加藤 2020)で目覚ましい成果を挙げている。一方で、鋸のような農工具の調査では、いまだに一般的ではない。今後、出土鋸のX線CTスキャン撮影が進むことにより、細部形態の観察が増加することが期待される。



第7図 くちばし形鋸の類例(1/2) 福聚寺7号墳3号主体部

4. 本資料の意義

本資料の意義は、鋸の用途論や技術史的位置付けをはじめ、多岐にわたる。冒頭に示したように、本

稿の目的は事実関係の提示であり、ここでは以下の2つに留め、その他については今後の専門的知見からの論考を待ちたい。

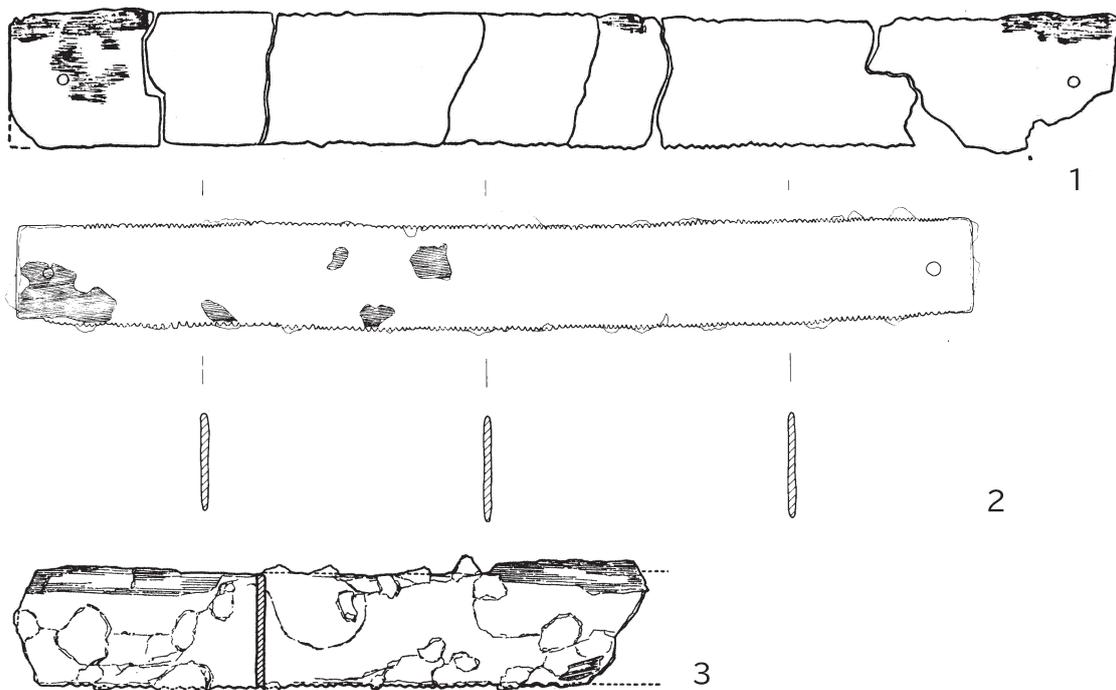
(1) 鉄製鋸導入時期の遡上

本資料は、日本列島へ鉄製鋸が導入された時期が弥生時代に遡上する可能性を示している。出土した鉄製鋸についての考古学的分析としては、伊藤実氏や丹下昌之氏の詳細な研究があり（伊藤 1993・丹下 1995）、古墳時代前期前葉の兵庫県たつの市権現山 51 号墳副葬品（第 8 図 1：近藤編 1991）が日本列島における最古の鋸の類例（以下、権現山鋸）として位置付けられていた。本資料が、それよりも古い、弥生時代後期後葉から末に属する可能性があることは、先述した通りである。

前期古墳に副葬された代表的な鉄製工具として、斧・鑿・鉋・刀子などが挙げられる。鋸の副葬は、斧などに比べて少ないものの、前期古墳副葬鋸は 20 例を数え、一定数を占める【注 6】。その分布は近畿地方と北部九州とに集中しつつも、日本海側さらには関東地方にも広がっている。鋸は、古墳時代前期段階で、少なくとも有力な地方首長が認識する程度には定着していたことがうかがえる。

一方、弥生時代における鋸の類例は、従来知られていなかった。これは、斧・鑿・鉋・刀子といった他の鉄製工具が弥生時代から存続している状況とは、大きく異なる。前期古墳副葬鋸の多くとは形態的差異が残るものの、本資料により弥生時代資料の不在という特異点は解消される。

鋸は、日本列島においてもっとも「鉄器化」が遅れる種類の一つであると評価されてきた（川越 1993）。本資料はその理解に一石を投じるものといえよう。鉄製農具・工具の導入については、地域ごとにその背景を多元的に理解する必要性が近年提起されている（樋上編 2017）。本資料は、北陸地方における「鉄器化」の先駆的様相を示す、重要な資料だと位置づけられる。



第8図 古墳時代前期前葉から中葉の無茎鋸 (1/2)

1 岡山県権現山 51 号墳 2 栃木県那須八幡塚古墳 3 奈良県メスリ山古墳

(2) 日本海沿岸を中心とした弥生時代手工業生産技術の再評価

以上のように、本資料は、日本海側における弥生時代生産技術の再評価を促すものである。近年、石川県小松市八日市地方遺跡で、弥生時代中期中葉ごろの年代が与えられる、鉈の祖型だと考えられる鉄製品が出土した(中屋・林・加藤・中谷編 2019)。八日市地方遺跡では、多種多様な鑄造鉄斧用の木柄が出土しており、日本海を通じて朝鮮半島もしくは中国大陸から鉄製工具が船載され、木工などの手工業生産に活用されたと考えられる(林 2022)。

3.(2)で示したように、本資料には、齒の形態など日本列島内では類例を見ない特徴がある。あるいは、八日市地方遺跡から出土した鉈の祖型と同じく、船載品なのかもしれない【注7】。とすれば、弥生時代後期段階にも、中国大陸を起源とする鉄器文化の影響が北陸地方に及んだと推測される。

林・藤島遺跡において、玉作に鉄製工具が重点的に投入されていたことを本稿冒頭に記した。鉄製工具の多くは、鑿や錐などの打割具・穿孔具であり、未成品の様相からも打割・穿孔での鉄器使用が復元できる。ただし、少数ながらも施溝分割の痕跡が認められる未成品が存在し、鉄製工具の使用が想定される(富山編 2009 p.379)。薄手の鑿だけでなく、本資料のような鋸も、施溝分割に使用された可能性がある。

さらに、弥生時代の日本海沿岸に分布する、精緻な施溝や線刻が駆使された木器(樋上編 2020)の製作過程でも、鋸が使用された可能性がある。すでに、「弥生時代後期を中心として、(鳥取県米子市)池ノ内遺跡例や(鳥取県鳥取市)青谷上寺地遺跡例のような、引き切り技法による一木櫛や簪が確認できる」との指摘(山田 2003 p.137:カッコ内追加)がなされている。「齒を鋸挽きで作出する櫛とも異なる」と位置付けられ(同前)、玉作と同様に、主に薄手の鑿が使用された可能性が高いとはいえ、本資料を含めた木工生産技術の再評価が期待される。

おわりに

以上のように、本資料は国内最古の鉄製鋸である可能性を指摘できる。しかし、遺構に伴わない包含層出土資料であり、確定はできない。国外の資料も含む、東アジアにおける古代鋸の再検討をおこなう中で、本資料の位置付けを図っていくべきであろう。

たびたび記してきたように、今回の検討において、X線 CT 画像を撮影できたことで、多くの新知見あるいは今後の課題を得ることができた。考古資料のX線 CT 画像による調査研究(鳥越 2023)が、さらに深まることを期待したい。とりわけ、鉄製鋸のような細部加工が施されている考古資料については、画期的な成果を生み出す可能性が高い。多角的な調査研究が深まることを願いつつ、本報告の結びとする。

付記

・本報告は、1を魚津知克(当センター主任)・木村孝一郎(当センター主任)・佐々木芽衣(当センター主査)、2~4を魚津が主に執筆し、全体を中川佳三(当センター所長)が監修した。

・本資料の検討については、注2及び注7に記したように、村上恭通・伊藤実・渡邊晶・上野祥史・山田昌久(故人:注7参照)の諸先生によるご指導を賜った。また、元興寺文化財研究所 塚本敏夫・初村武寛の両氏のご教示を得た。関連資料の調査にあたっては、久留米市埋蔵文化財センター・水原道範

氏、ならびに福岡県人づくり・県民生活部文化振興課九州国立博物館・世界遺産室 岡寺未幾氏にご配慮を頂いた。末筆ながら、深く感謝申し上げます。

注

- 1 土器・土製品 52 点、木器・木製品 18 点、石器・石製品 333 点、ガラス玉 21 点、金属製品 520 点が、指定の内訳である。
- 2 考古学からは愛媛大学法文学部 村上恭通教授及び元広島県教育事業団埋蔵文化財調査室室長 伊藤実氏、建築技術史学からは元竹中大工道具博物館学芸部長 渡邊晶氏からのご指導を賜った。加えて、中国大陸における関連する考古資料の評価について、国立歴史民俗博物館 上野祥史准教授からのご教示も得た。諸先生におかれては、ご多忙にもかかわらず、評価の難しい本資料を真摯にご検討いただいたのは感謝に堪えない。
- 3 該当資料は、発掘調査報告書 p.417 第 19 表では「手鎌 C-10 グリッド VIII 層」と記されている。
- 4 ただし、本資料が出土した東地区では、VIII 層からIX 層において確認した遺構の中に、古墳時代前期初頭から前葉頃のものも若干含まれる（富山編 2009 p.27）。この点には注意が必要である。
- 5 久留米市埋蔵文化財センターにおいて実見し、併せて X 線透過画像を閲覧した。
- 6 那須八幡塚古墳（栃木県那珂川町）、大丸山古墳（山梨県甲府市）、雨の宮 1 号墳（石川県中能登町）、松林山古墳（静岡県磐田市）、船木山 24 号墳（岐阜県本巣市）、南平 1 号墳（滋賀県栗東市）、紫金山古墳（大阪府茨木市）、庭鳥塚古墳（大阪府羽曳野市）、富雄丸山古墳（奈良県奈良市）、メスリ山古墳（奈良県桜井市）、池ノ内 6 号墳（奈良県桜井市）、権現山 51 号墳（兵庫県たつの市）、丸山 1 号墳（兵庫県丹波市）、花光寺山古墳（岡山県瀬戸内市）、橋津（馬ノ山）4 号墳（鳥取県湯梨浜町）、向谷 1 号墳（福岡県春日市）、阿志岐 B-26 号墳（福岡県筑紫野市）、エゲ古墳（福岡県那珂川市）、井原 1 号墳（福岡県糸島市）、福聚寺 7 号墳（福岡県久留米市）の 20 例である。
- 7 愛媛大学法文学部 村上恭通教授より、関連資料として中華人民共和国安徽省天長市三角圩漢墓 M1 副葬例（安徽省文物考古研究所編 2013）をご教示いただいた。前漢後期の良好な副葬例で、斧・鑿・錐などの鉄製工具セットの中に鋸が含まれる。鋸は、長方形・くちばし形の双方が存在する。本副葬例については、国立歴史民俗博物館 上野祥史准教授からもご指導いただいた。一方、中国大陸における鋸鎌は、青銅製のものが広く知られているが、安徽省淮南市寿县安豊塘閘壩工程遺跡（殷 1960）や広東省広州市広州漢墓（広州市文物管理委員会ほか 1981）からは漢代の鋸鎌（齒刃鎌）が出土している（白 2005 p.203）。これらが、本資料の鋸の形態とどこまで共通するかについては、今後の検討課題としたい。鋸鎌については、東京都立大学 山田昌久名誉教授からご教示いただいたが、本稿刊行前の令和 8 年 1 月にご逝去されたのは痛惜の極みである。

引用・参考文献

- 阿南翔悟 2013 「九州出土鋸について」『福岡大学考古学論集 2』 福岡大学考古学研究室 pp.265-275
- 伊藤 実 1993 「古代の鋸」『考古論集』潮見浩先生退官記念論集 潮見浩先生退官記念事業会 pp.535-562
- 小澤太郎（編）2005 『福聚寺古墳群』久留米市文化財調査報告書第 207 集 久留米市教育委員会
- 加藤和歳（編）2020 『X 線 CT スキャナによる船原古墳出土遺物の研究』（科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書，平成 28 年度～令和元年度（2016 年度～2019 年度））九州歴史資料館
- 川越哲志 1993 『弥生時代の鉄器文化』雄山閣
- 近藤義郎（編）1991 『権現山 51 号墳』『権現山 51 号墳』刊行会
- 伊達宗泰（編）1977 『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 35 冊 奈良県教育委員会
- 丹下昌之 1995 「古代遺跡出土鋸の研究」『民具研究』110 日本民具学会 pp.1-18

- 富山正明（編）2009 『林・藤島遺跡 泉田地区』福井県埋蔵文化財調査報告第106集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 鳥越俊行 2023 「X線CTの現況」『考古学ジャーナル』第786号 pp.11-15
- 中屋克彦・林大智・加藤江莉・中谷光里（編）2019『小松市 八日市地方遺跡』北陸新幹線建設事業（金沢・敦賀間）に係る埋蔵文化財発掘調査概要報告書 石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 野島 永 2009 『初期国家形成過程の鉄器文化』 雄山閣
- 橋本達也（編）2017 『X線CT×島内139号地下式横穴墓』科研費成果公開研究会（X線CT調査による古墳時代甲冑のデジタルアーカイブおよび型式学的新研究） 鹿児島大学総合研究博物館
- 橋本達也（編）2018 『X線CT調査による古墳時代甲冑の研究』科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告書 鹿児島大学総合研究博物館
- 林 大智 2022 「工具からみた弥生時代前半期の鉄器普及」『月刊考古学ジャーナル』No.766 ニューサイエンス社 pp.19-23
- 樋上 昇（編）2017 『木製品からみた鉄器化の諸問題』シンポジウム記録10 考古学研究会
- 樋上 昇（編）2020 『YAYOI モダンデザイン』 愛知県陶磁美術館
- 三木文雄・村井崑雄 1957『那須八幡塚』 小川町古代文化研究会
- 村上恭通 1998 『倭人と鉄の考古学』 青木書店
- 村上恭通 2011 「弥生時代の鉄文化」『講座 日本の考古学』5 青木書店
- 山田昌久 2003『考古資料大観第8巻 弥生・古墳時代木・繊維製品』
- 吉川金次 1976 『鋸』ものと人間の文化史18 法政大学出版局
- 渡邊 晶 2004 『日本建築技術史の研究』 中央公論美術出版

（中国語：ピンイン順）

- 安徽省文物考古研究所（編）2013 『天長三角圩墓地』 科学出版社
- 白雲翔 2005 『先秦兩漢鉄器的考古学研究』 科学出版社（佐々木宏治訳 2009『中国古代の鉄器研究』 同成社）
- 広州市文物管理委員会ほか 1981 『広州漢墓』 文物出版社
- 李京華 2007 「鉄器造型の時代特征」『中国鉄器芸術』 北京燕山出版社（李京華 2011 『李京華考古文集』 科学出版社 所収）
- 殷滌非 1960 「安徽省寿県安豊塘発現漢代閘壩工程遺跡」『文物』1960年第1期

挿図出典

- 第1図 当センター撮影
- 第2図 元興寺文化財研究所撮影（当センター委託）
- 第3図 魚津実測（細部はX線透過画像に拠る）
- 第4図～第6図 福井県工業技術センター提供
- 第7図 （小澤編 2005）を実見の上一部追加修正
- 第8図 1 （近藤編 1991） 2 （三木・村井 1957） 3 （伊達編 1977）

紀要 第1号

令和8年 3月19日 印刷

令和8年 3月23日 発行

印刷(電子版)・発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒918-8226 福井県福井市大畑町 97-21-3
